candy days

歩生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃａｎｄｙ　ｄａｙｓ

【Ｎコード】
Ｎ５３００Ｙ

【作者名】
歩生

【あらすじ】
仕事をクビになって彼氏を寝取られやけ酒煽ってぐでんぐでん。調子に乗って秘蔵の一本を開けようと手にしたところで、片手に日本酒で目の前には見知らぬ金髪美女。どうやら異世界に召喚されたようです。さて、どうやって帰ろうか？

酔っぱらいはくだを巻く（前書き）

初投稿です。
お見苦しい所もあるとは思いますが、よろしければお付き合いください。

酔っぱらいはくだを巻く

ちょっとちょっと、そこの外人さん！　そう、そこの金髪金目でナイスバディーのお姉さん！　あなた！　その左手に持った酒瓶はなーに？　何のお酒なの？　ウィスキー？　ブランデー？　はたまたワイン？　ちょっと味見させてくれたりしない？　私もさっき開けたばっかりのポン酒あげるからさーぁ？　あ、飲んだことある？　日本酒。え、無い？　そっかー、じゃぁまずは味見ていど、……ってあぁ！　そんな一気に煽るもんじゃないの！　もっとこう味わって、ん？　おかわり？　気に入ったの？　あらまぁ、顔に似合わずイケるクチね外人さん。そうでしょそうでしょおいしいでしょ。私のお気に入りなのよー。もう3年も前からここの酒蔵のファンでさー、あ、そっちのもくれるの？　ありがとう！　――、くはっ！　なにこれうまっ！　こんなの飲んだことないよ！　どこ産？　てか分類は何になるわけ？　うーまーいー！　ナッツ？　これももらっていいの？　なになに？　この酒と一緒に食えって？　んっ！　まっ！！　すっ　ごく合うねー！　あ、それならこのポン酒にはこっちの……あれ？　漬物、さっき出したばっかりなのに、あれ？　おっかしーな、どこいった？　あー、そう？　うん……。じゃぁまた今度ね！　こう見えて漬物には結構自信があるんだからね！　ぬか床を任されて１０年！　１日たりとも、……うん？　歳？　今年で２４だけど、何？　同い年くらいでしょ？　見えない？　あー、もしかして、アジア人見るの初めて？　ほら良く言うじゃん？　アジア人は童顔だって。それに　ほら、私って背ぇ低いからじゃない？　……ぶっ！　あはっははっ！　無い無い！　あはははは！　じゅ、１８歳は無いわよ！　いくらな　んでもそれは無理だって！　あはは！　ひー、おっかしー。同い年かー、そっかー。よろしくーって、そういえば名乗ってなかったわね。私、漆原素子（うるしばら もとこ）。２４歳。あんたは？

彼女は人間じゃないくらいに可愛かった

（起きてー）
もうちょっと寝てたい。
（起きてー）
（遊ぼーよー）
「んー…」
目を閉じていても判るくらいには部屋の中が明るいし、いくら土曜だからっていつまでも寝てるわけにいかないし、そろそろ起きないとなぁ。
それにしても頭が重い。昨日は結構飲んだもんなー。とりあえず水、水飲みたい。しょうがない、起きるか。
（水）
（水ーみずー）
ぽた、と顔に水が垂れた。
「雨漏り？！」
驚いて飛び起きると、見慣れない部屋とトンボみたいな羽の生えた小さい人間が目に入った。
「……」
いやまてなにこれどういうことなのちょっとだれかせつめいもとむ。
ここはどこで、目の前のやたらとファンシーな生き物は何で、隣りで寝ている金髪美女は誰で、ええと、あとは、さっきの雨漏りはどこからしたのかってことよ。
（雨漏りじゃないよ？）
（起きた！）
（ふぁんしー？）
（遊ぼー？）
（遊ぼ遊ぼ）

（モトコ、遊ぼ！）
「うん？」
待って、今私口に出してた？　出してた、かも？　ああもうダメだ。十秒前の自分に自信が持てない。
一人暮らしが長いと独り言が多くなるって言うし、口に出してたのかも。
（喋ってないよー）
（モトコ、ひとり？）
うん、そう。一人暮らし。
（アーニャと一緒だね）
口に出してないのに会話可能、ということはアレだな。この妖精さんみたいな可愛い生き物は私が作り出した想像上の生き物なんだな。
そういえばアルコール中毒者って幻覚が見えたりするんじゃなかったっけ。
「はは……」
この歳でアル中とかやばいな。
（違うよー）
（違うよー）
自分で自分を慰めてることになるのかなこれ。それにしても私ってこんなに可愛い脳みそだったのか。
妖精さんの全長は大体１５センチくらいで、体は人型をしているけど凹凸があるわけではない。そのくせ手足の指はきちんと五本あるし、顔だって一人ひとりの判別がつく程度には細かい。服は着ていないが、彼らの体は羽の先から足元まですべてが薄い赤や緑一色で、おまけにうっすらと発光していた。羽は向こうが透けて見えるほどに薄く、体の半分ほどの大きさのものが二枚背中から生えていた。
手近な妖精さんを観察していると、彼女（？）は恥ずかしそうに羽を震わせた。性別とかあるんだろうか。

（ないよー）
（なーい）
そっかー、ないのかー。さすが私、おおざっぱだな。
「さすがに変な色の子はいないのねぇ」
玉虫色とかじゃなくてよかった。
（私、水！）
（風ー）
（月！　月！）
「うん？」
（六個だよー）
六個。六色ってことかな？
（そうー）
ええと、さっき『水』って言ってた子は青で、『風』の子は白、『月』が黒で、
（火！）
赤。
（地）
緑。
（日でーす）
黄、いや金かな。
これで六色か。確かに周りを見回すとその色以外の妖精さんはいない。
「ふーん」
きゃっきゃっと声を立てて笑いながら妖精さんたちは私の周りをふわふわと飛び回ったり、私の肩に腰かけてみたりと勝手に遊びだしている。
しかしそれにしても可愛い。小さいものはどうしてこんなに可愛いのか。かの清少納言も言ってた気がする。
（せーしょーなごん？）
ううん。ナシゴレンみたいな響きになってる。かわいいぃぃ！

ナシゴレン食べたことないけど。
あれ？　でも変ね。私が知っているはずのことを、この子たちは知らない？　私の幻覚なのに？
ふと、窓の外を見ると太陽の光が燦々と外の森と部屋の中を照らしている。黒い太陽から出た金掛かった光が。
「……」
だいじょうぶだいじょうぶ。うん。これは私が作り出したにんだから。天変地異とかじゃないはずだから。たぶん。おそらく。めいびー。
そぉっと窓を押し開けると、外から少し冷たい澄んだ空気が入ってきた。部屋の中は案外淀んでいたらしい。鳥のさえずりが聞こえた方を見れば意外と近くの木の上に巣があるらしい。木の香りが気持ち良い。飲みすぎた次の日の朝にはちょっと眩しすぎるけど。
で、ここはどこなのかな？
（アーニャに聞きなよう）
（アーニャー）
「さっきも言ってたわねアーニャって、……この人？」
「んぅ……」
悩ましげな声を上げて、ベッドで寝ていた金髪美女が寝返りを打った。その豊かな金髪は大きく開いたワンピースの胸元を彩っていて、まるで映画か何かのようだった。
これも幻覚かー。私って想像力逞しいタイプだったのか。知らなかったなぁ。
「この人が、アーニャ？」
（そうだよー）
（アーニャだよ）
アーニャ（と呼ばせてもらおう）の枕元には数冊の古びた本が積んであった。どうやら私と同じでベッドで本を読む派らしい。
本に手を伸ばす。タイトルは読めないが、表紙に直接彫ってある模様みたいなものは読めた。模様というか、これはもしかして、

「魔法陣？」
なんか、西洋魔法物の映画とかに出てきそうな円の周りに文字が書いてあったり複雑な模様を描いていたりするコレはもしかしてアレじゃない？
（そうだよー魔法陣だよー）
待て待て、なんでタイトルは読めないのに魔法陣は読めたの？
しかもこれは日本語（母国語）の感覚に近い。読むと同時に理解できるレベルだ。
２４年間生きてきて魔法陣を読む機会なんて一度もなかったはずなのにどうしてこれが理解できるの？
タイトルをよくよく見ても、まずアルファベットではないし日本語でもない。漢字でもないし、見た目はアラビア語に近い気もするけど、単に達筆なフォントなのかもしれない。
「ねぇ、これなんて読むの？」
（幻想種と信仰）
試しに私の腕にぶら下がって遊んでいた緑色の子に聞いてみるとすぐに返事が返ってきた。
私が読めない物をなんで読めるの？
「……すごいのねぇ」
その頭を撫でてやると、緑色の子はうれしそうにパタパタと本の周りを飛び回った。かわいいなぁ。
撫でた。そう、触れた。幻覚って触れるものだったっけ……？
そういやさっきから私を遊具代わりにして遊んでたなぁ、この子たち。
触れるし匂いもする。聞こえるし見えるし気配もする。あとは味があれば完璧ってことか。そういえば昨夜は飲んだなー。おいしかったなー。ナッツみたいなのも食べたなー。あれもおいしかったなー。いままでに食べたことのない味だったもんなー。あっはっはー。
……まじかー。
「え、えー……」

（まじー？）
（まじーか？）
（まじまじー？）
もしかしてもしかすると、ここは幻覚ではなくて現実？
（現実だよー？）
（現実ぅ）
ちょっとよく思い出してみよう。そうだ、落ち着くのよ私。落ち着いているようで実は落ち着いてないとかよくやるじゃない私。
昨日、は金曜日で普通に仕事に行って、帰ろうと思ったら上司に呼び出されて、クビになった。
で、彼氏に慰めてもらおうと思ったけど電話がつながらなかったから直接部屋まで行ったら友達だと思ってた女と二人で風呂に入ってた。
むかついたから彼氏の部屋にあった私の荷物を全部回収して、合鍵を置いて部屋を出た。
帰る途中、元彼にメール送って着信拒否に設定して、買ってもらったアクセサリーを売り払って、そのお金で酒とつまみを買った。
帰ってから、化粧だけ落として部屋着に着替えて、酒飲みながら元彼との思い出のあるものをゴミ袋に詰めて、それが終ったから秘蔵の一本を開けようと手にしたところで片手に日本酒で目の前には見知らぬ外人さん。はて？　とお互いに首をかしげたところで外人さんが酒瓶片手なのを見て、女二人で酒盛りを始め、えっと……。後は覚えてないけどたぶん酔いつぶれて寝たんじゃないかな？　で、今さっき起きた。と。
自分の格好を確認すれば飲み始めた時と同じ、下は高校のときのジャージに上は伸びきったTシャツだ。
「うん、よくわかんない」
部屋で一人で飲んでたはずなのに、どうして……？
（どうしてー？）
（アーニャが呼んだんだよー）

（仲良しー）
そういえば昨日飲んだ金髪の外人さんもアーニャっていったっけなぁ。てか、こいつか。
さて、さしあたってはこの寝こけている美女にいろいろと面倒を見てもらえたりしないかな。そうでなくともせめて現状確認くらいはさせてくれないかな。酒盛りした仲だし。
気持ちよさそうに寝こけている人間を叩き起こすのは趣味じゃないが、起こすか。
「ちょっと、そろそろ起きてよ。水飲みたいんだけどさ、ここってあんたんち？」
「水、水、欲しい」
うん。私も欲しいのよね。
「どこ？」
「だいどころ……水。みずー」
よろり、と亡霊のように歩く彼女について部屋を出てすぐ左の台所にある大きい甕から水を汲んで飲んでいた。
「のみすぎたー。ぎぼぢあるーぅ」
「私にもちょーだい」
「はーい。……」
「おはよう」
「おはよう、ございます」
そこでやっと彼女は酔いと眠りから覚めた目をした。あらかわいい。
背は高いしイイ体をしているけれど、顔は童顔なのね。世の男どもが放って置かないだろうなぁ。
「あなた、精霊さんなの？」
「人間よ」
失礼な。精霊って、この子達みたいな小さくて可愛くて羽とか生えてるこのことでしょう？
「……まさか」

つぶやいて急いで先ほどまでの部屋に戻っていった。なんだろ。
私が部屋に入ると彼女は床に膝をついて、そこに描かれた大きな魔法陣を食い入るように見つめていた。
「ええと、うん、だから……」
「ねぇ、」
「ひゃあ！」
声をかけると彼女は驚いて頭からコケた。痛そ……。
手を差し出すと恐る恐るといった様子で彼女は私の手を取った。
「大丈夫？」
「え、ええ。ありがとう……。あの、ご、ごめんなさい！」
「え？」
「そ、その、あの、あなたのこと、喚んだの私なの……」
うん？　酒飲み友達が欲しくて呼んだとかそういう？
「あの、その、私、酔っ払って、幻想種を呼び出そうとして、でも失敗しちゃったみたいで、その、ごめんなさい！」
「とりあえずちょっと落ち着きましょうか」
大きな金色の瞳に涙をいっぱいに溜めて必死に謝られてはまるでこちらが悪者みたいだ。
「ええ、ありがと……あなたは、落ち着いているのね」
「ああ、あなたが寝ている間にこの子たちに色々教えてもらったから」
ね？　と近くを飛んでいた金色の子に言えばねー？　と返してくれた。かわいいなぁ。
「精霊さんが見えるの？　いえ、喋れるのね？」
「最初は私の幻覚かとも思ったんだけどそうも言ってられなくなってきたからね」
「幻覚？」
「あなた、ここがどこだかわかる？　私はわからないわ」
「あ、ええっと、ここはヴィアン国の……いえ、きっとそういうことじゃないのよね。たぶん、なんだけどここはあなたがいたところ

とは別の世界よ」
「ああ、うん。まぁ妖精さんを現実であると仮定したときからその覚悟はしてたわ」
　さらにはさっき見たこの家の台所。ガスコンロも無いような辺鄙な所、日本じゃあまり思いつかない。
「それでね、その……」
「あなたが呼んだのはさっき聞いたわ。で、私は帰れるのよね？」
「……わ、わからないの」
「うん、まぁ泣きそうなほど謝られた時からそんな予感はしてたんだけどね？」
「で、でも、喚べたんだから帰ることも出来るはず……たぶん」
　また泣きそうになりながら彼女は私の両手を取った。
「帰るまでの面倒は私が見ます！　安心して下さい！」
「あ、うん。よろしくお願いします」
　なんだか、良い人そうでよかった。
　ぐぅ。
「……」
「……お腹、すきましたね」
　えへへと彼女は笑ってご飯にしましょうと台所へ逃げた。
　可愛いなぁ。

ご飯の前には手を洗いましょう

「わぁ、おいしそう。いただきます」
「いだ、ます？」
うん？　そういえば「いただきます」も「ごちそうさま」も日本のニュアンスが強いって聞いたことがある気がする。
「私の国では食べる前に言うの。意味としては料理を作ってくれた人とか食材を提供してくれた農家の人とか、自分の目の前にあったかいご飯が有ることへの感謝を表す言葉なの」
「へぇ。素敵ね」
アーニャは子供のような笑顔を浮かべた。なんだか、むずがゆいなぁ。
「じゃ、いただきます」
「いただきます」
さて、それはともかくこの団子状の黒い丸いものはなんだろうか。ごま団子とかこんな感じかもしれない。いや、ごま団子はもっと灰色だった気がする。
えい。
「おいしい！」
よくわからないけど凄くジューシーでおいしい。お肉、なのかな？　肉団子？　イカスミで味付けたら確かにこのくらい黒くなるかも知れない。
スパイスが効いてておいしい。
「あ、ええ、よかったわ……」
「何？　あ、食べ方おかしい？」
スプーンをもうちょっと平べったくしたようなものを出されたから、てっきりスプーンだと思って食べてたけど違う使い方があったりするのかしら？
「ああ、いえ、あなた本当に精霊さんではないのね」

「もう。そう言ってるじゃない。でもなんで？」
「精霊さんは私たちみたいなご飯は食べないのよ」
へぇ。そうなんだ。そういえばさっきからふわふわと飛んだりテーブルの上でかくれんぼしたりしていて、食材には手を出してはいない。
「ね、あ……えっと、そういえば自己紹介昨日したきりよね？」
「そういえばそうね」
これはいけない。いい大人のくせにその程度のこともせずにご飯をご馳走になるなんて。
それにしてもこのイカスミスープ（仮）おいしいわぁ。なんだろ、やっぱりだしなのかな。
「改めまして、私は漆原素子」
「私はアーネッカ・フラノワ」
「あーねか・うあんわ？」
「アーニャでいいわ」
「じゃぁ私のこともモトコでいいわ」
「？　あなた、ううしだらじゃない　の？」
ううしだらって……やっぱり発音て難しいのね。
「え？　そうよ。漆原素子……ええと私の国では名字を先に、名前を後にするのが一般的だから、私個人を指すのは『モトコ』よ」
この赤い野菜？　みたいなのも甘くておいしい。ちょっと柑橘系の味がするけど。
「モ、ト、コ」
「なに、アーニャ？」
発音を確かめただけだと分かっていたけれどその様が可愛らしくって、つい返事をしてしまった。
アーニャは返事があるとは思わなかったらしく恥ずかしそうに自分のスープ皿に視線を落とした。
「……ううん。誰かと御飯食べるの久しぶりだからなんだか嬉しくって」

「私もよ。最近は彼氏ともあんまり会ってなかったし、両親はとっくにいないしね。アーニャは仕事か何かで一人暮らしなの？」
「あ、ううん。私も両親がいないから」
「なんか、結構同じだね確か歳も同じでしょう？」
主食はコレか。見た目はナンぽい！　食べてもナンぽい！　小麦粉を水で練って焼くんだからおなじになるのは当たり前といえば当たり前なのかもなー。面白い。色は黄色いけど。
「２４歳だったかしら？」
「そうよー。昨日もアーニャ、私のことそうは見えないって言ってたわね」
「え、ええ。１８歳くらいに見えるもの……」
１８。ふむ、と自分の体を見下ろす。いつもと特に変わりはないので、東洋人は童顔に見えるというアレかと納得する。
２４、なんだけどなぁ。まぁ若く見られる分にはほめ言葉として受け取っておこうじゃないか。
「そうだ、ねぇモトコ、その、あなた魔術はどのくらい使えるの？」
「ま、じゅつ？」
探るようなアーニャの視線に私は今聞いた単語が自分の聞き間違いである事を祈った。
「ええ。その髪と眼の色でしょう？　あなたのいた世界ではどんな系統の魔術師だったのかしらと思って」
髪と眼の色がなんだって？
髪は一度も色を入れたり抜いたりしていないからそんなにひどい状態ではないと思うんだけど、何かマズイのかな。
私は自分の肩胸元まで伸びている黒い髪と、アーニャの胸の下まで伸ばされたウェーブがかった金髪を見比べた。
「魔術って、あれよね？　なにもないところから火が出たりとか？」
それじゃ手品か。
「まぁ、できなくはないわね」
「……」

「？　モトコ？」
「無いわ」
「何が？　系統？」
「『魔術』なんて私のいた世界には無かったの」
「え？　じゃ、じゃぁ精霊さんは？」
「いないわ」
　そんなファンタジーなものが見えるなんて言ったら黄色い救急車呼ばれるわよ。
（ふぁんたじー！）
（ふぁんたじ！）
　言葉の響きが気に入ったのか、数人がふりふりと踊りだした。楽しそうだなぁ。
「……そう。モトコ、あなた、よく……」
「正気でいられるって？」
　踊る妖精さんを眺めながらアーニャの言葉の先を言うと、彼女は驚いたように食器を鳴らした。
「！　あ、いえ、そういうつもりじゃ……」
「いいわよ。自分でもちょっと落ち着きすぎだなって思ってる」
　そう、どうもおかしい。なぜかすんなりとこの状況を受け入れている自分がいる。普通はもうちょっと取り乱したり泣き喚いたりするんじゃないだろうか。
　そんなことしたって帰れるわけではないし時間と体力の無駄だからしないけど。
　そもそも、ここが現実であるという証明をするのは私が誰かという証明をするのと同じくらい難しい。
　ならばもう、現実だと思えばいい。なぜなら夢だった場合、がんばっても悪いことはない。現実だった場合、がんばらないとまずい。よってがんばろう。はい決定。
「ここが現実なのか私の想像なのかなんてこと考えたって仕方ないでしょう？　そんなこと悩んだり嘆いたりして帰れるっていうなら

そうするけど、そうでないのなら時間の無駄よ。貧乏暇なしってね。悩むのも泣くのも酒の席だけで十分よ」
「そう。そうね」
アーニャはちょっと視線を彷徨わせてから口だけで微笑んだ。
「ごちそうさまでした」
「それもモトコの国の挨拶？」
「ええ。食べる前に言ったものの食後版てところね」
「へぇ……。ねぇ、モトコ、早速で悪いんだけど、生活する上でいくつか約束して欲しいことがあるの」
食後のお茶を飲みながら、アーニャはそう切り出した。
「うん」
「まず、その髪と目の色なんだけど、ちょっと目立つのよね」
「そうなの？」
「ええ。この国の人の殆どは日（ニッチ）の髪に火（ヒ）の瞳なの」
（日はぼく！）
（火は僕）
日は金色、火は赤色のことらしい。
そういえばさっき妖精さんに教えてもらった気がする。
「黒い人はいないの？」
「いるとは思うけど、『揃った』人となるとなかなか……」
「揃った？」
「ええ。髪の色と眼の色が揃うと魔術師としては三流に見られるから悪い意味で目立ってしまうの」
「アーニャも？」
「ええ」
金髪に金色の瞳のアーニャは言われたくなかったのか私から視線を逸した。
「そんなに綺麗なのに、なんだかもったいないわね」
それともこの世界では美醜の価値観が違うのだろうか。
「……ありがとう。モトコの髪と目も綺麗よ」

「それはどうも」
日本人はほとんどこの色なんだけど、話がややこしくなりそうだから黙っていよう。
「あれ？　でも三流？　別世界から人間を呼んでくるのってそんなに簡単なの？」
「いえ、その、三流、とは言われてるんだけど、その」
（アーニャはすごいんだよー！）
（そうだよー！）
（しじょーさいねんしょうなんだから！）
（天才なんだよ！）
アーニャが口ごもると妖精さんたちが一斉にアーニャを褒め始めた。
「一流なのに三流って言われてるってこと？　なにそれ？」
「あ、あのね、魔術士は自分の体に宿している色の種類によって得意な魔術が制限されるって言われてるの。さっきの髪と目の色だと二色だし、例えば日火（ニッカ）の髪に火水（カスイ）の瞳なら三色ね」
「ニッカ？　カスイ？」
知らない単語が出てきたぞー。多分色の名前なんだろうけど。
（日火はぼくとー、）
（ぼくー！）
金色の子と赤色の子が二人で手をつないでくるくると回りだすと、その二人の周りがぼんやりとオレンジ色になった。
（火水は、私と）
（オレ！）
赤色の子と青色の子も同じように回ると、今度は紫色になった。
ということは、オレンジ色の髪に紫色の瞳で金と赤と青で三色ってことなのかな。
「宿していない色の魔術は使えなくはないけれど努力が必要になってくるわ。だから三流と言われるの」
「それで、一色しかないアーニャはなんで天才なの？」

「て、天才だなんてとんでもない！　私は、ただ、精霊さんたちとお話できるから他の人よりも少しだけ上手くできるだけよ」
消え入りそうな語尾でアーニャは直ぐ側にいた妖精さんを手の上に乗せた。
「お話、て普通できないの？」
朝、その子たちに起こされたんですけど？
「ええ、普通は見えないし聞こえないし触れないし、喋れないわ」
「喋れない？」
「実はね、さっきからこうして私たちが話しているのは『精霊言語』と呼ばれる言語で、魔方陣を描いたり呪文を唱えたりするときに使うもので普通は楽しくおしゃべりするのに使わないのよ」
「じゃぁ、アーニャも普段は違う言葉で喋ってるの？」
「＊＊＊＊＊＊、よ」
「え？　なんて言ったの？」
聞き取ることすらできなかった。人の名前とか『いただきます』とか知らない単語でも聞き取ることはできたはずなのに。
「『大陸言語』っていうの。でも、そう。大陸言語が使えないの……」
もしかしてさっきの本のタイトルもその大陸言語だったのかな。
（そうだよー）
（僕たち読めるー）
「たぶん、モトコを召喚した時の魔方陣が『幻想種』を呼び出すときのものを改良したものだったから、そのせいでモトコはこの世界では精霊としての役割もしくはそれに近い能力が付加されたってことかしら？　だとすると――」
専門用語わかんない。
アーニャはぶつぶつと考察を続けている。
「アーニャは妖精さんとお話できる天才だから一流になれた、てことね。で？　私の髪と目の色が揃ってると三流として悪目立ちするからどうするって？」

「あ、ええと、色を変色させる薬を飲んでもらうわ。大丈夫。私も普段飲んでるものだし」
　できればそういう得体の知れない物は遠慮したいところである。朝ごはんをたっぷりごちそうになった身ではあるが。
「それこそ魔法でどうにかすればいいのに」
「他の魔術師には私が魔術を使っていることがわかってしまうのよ。それじゃぁ自分が怪しい者ですと言っているようなものだもの、変化させた意味が無いわ」
　なるほどー。いろいろ大変なんだなー。
「それに、『揃った』人間は珍しいから下手をすれば売られたり研究材料として捕まる可能性もあるわ。特に、モトコは異世界人だし」
　さらっと怖い事を言ってくださる。
「大人しく飲みます」
「さっきも言ったとおり、精霊さんとおしゃべり出来るのは本当に珍しいことだから、人前で話しかけたり触ったりしちゃダメよ」
「でも、この子達の方から心を読んでくるよ？」
「それはきっとモトコが焦っていたんじゃないかしら。強く思ったことは精霊さんに聞こえてしまうの。そうでないことは聞こえないから大丈夫よ」
　確かに、起き抜けの頃は妖精さんが心の中を読んできていたけれど朝ごはんを食べ終わった今は全くそんなことはない。
「あとはそうね……、そういえばさっき『妖精さん』て言ったかしら？」
「言ったわ」
「その、この世界では彼らのことは『精霊』と呼ぶの。『妖精』は別にいるのよ」
（なになに？）
（僕たちの話？）
（僕の話？）
　寄ってきた妖精さん、ではなく精霊さんを軽く撫でてやれば小首

をかしげて満足そうに飛んでいった。
「ふぅん。やっぱりいろいろいるのね」
ファンタジーは魔法と精霊さんだけで十分なんだけど、アーニャの口ぶりからして他にもそのテの存在がいるんだろうなぁ。もう何が出ても驚かないわよー。
「あとの細かい注意事項なんかは気が付いたらまた言うわね。着替えは私ので大丈夫かしら？」
「ダメじゃないかな」
私は１５８センチと小柄な方だが、アーニャは１７０センチくらいある。更に胸のサイズが違いすぎる。私は一応Ｃではあるがアーニャはグラビアアイドル並みである。ぜひ一度触らせていただきたい。ではなく。
「うーん、でもその格好で外に出るわけにもいかないし」
前述のとおり、私は部屋着である。ついでに言えばはだしである。そろそろ足の裏が冷えてきている。
「そういえば、アーニャはここに住んでるの？」
窓からは木しか見えないのでここが森か林の中であることはわかるが、妙齢の女性が一人でそんなところに住むものだろうか。
「違うわ」
硬い声でアーニャは言った。
「私ね、私、逃げてきたの」

ご飯の前には手を洗いましょう（後書き）

お気に入り登録、とれも嬉しいです。ありがとうございます。

いつだって、誰かに頼って生きてきた

「いい大人なんだからそれはまずいわよ」
私みたいにクビになったのならともかく。
元の世界に帰ったら、就職活動から始めないとなぁ。ちくしょう、あのハゲ上司め。
「それで？　なんでそんなことになったの？」
「え、えっと……」
アーニャはすっかり冷めてしまったカップの縁をそっと撫でて、ゆっくりと口を開いた。
「私ね、教師になりたいの。でも私が行きたい学校、母校なんだけど、そこの教師になるには一番弟子を学校側に認めてもらわなくちゃいけないの」
「認めてもらうって？」
「手段はいろいろあるんだけど、最低限必要なのは学校に入学することができれば師匠の方も研修を認められることになってるの。……でもね、私、一色でしょう？　だから、弟子になりたいって言ってくれる人がいなくって」
口の端をわずかに持ち上げて自嘲する。精霊さんたちが心配そうにアーニャの髪や指先に触れているのを私はただ黙って見ていた。
「でもね、今年は私のお師匠様のお知り合いだって言う方に、紹介してもらうはずだったの。条件は私が一年間研究員見習いとしてその方のお手伝いをすること。でもね、だめなの」
ただでさえ白い顔がさらに白く見えるほどきつく、アーニャは眉根を寄せた。
「紹介してもらった人、別の方のお弟子さんなの。一番弟子だけは他の魔術師との重複は認められないのよ」
「それ、知ってて紹介してきたってこと？」
緩慢な動作でアーニャは首を縦に振った。

酷い。
「本当はね、精霊さんが教えてくれたから、紹介されてすぐにこの人はだめだってわかったの。でも、精霊さんとお話しできるって誰にも言えないから、私……」
泣きそうな気配に精霊さんたちが慰めようとアーニャの周りを飛び回る。ふわふわと、きらきらと。
不謹慎だけど、それはとても幻想的で目が離せなかった。
「もうすぐ約束の一年が過ぎるんだけど、どうしてもその人を弟子にしたくなくて、休暇なのをいいことにこんな所まで逃げてきちゃった」
「そう……。でもそれならお弟子さんを断ればいいじゃない」
「そう、なんだけど……」
「断りずらいの？」
「……ええ」
いたなぁ、こういう人。自分はちっとも悪くないのになぜか言えなくて損をする人。
「じゃぁ、教師になれなくてもいいのね？」
「それは！　……嫌よ」
「じゃぁ言わなくちゃ。ね？」
「え、ええ……」
こういう時は、肯定の言葉を発しているうちに事を進めてしまうに限る。
「それじゃぁ早速そのお手伝いしてた人の所まで行きましょうか」
「あ、その人ならすぐそこまで来てるわ」
（来てるー）
（来てるよー）
（アーニャがいないから探してるよ）
えー、休暇なんじゃなかったの？　休日出勤を強要しに来たとか？　それも最悪だな。
でも、会いに行く途中でアーニャの心が折れるかもしれないこと

を考えると、手間が省けたわね。
「なら、お断りしに行きますか」

＊＊＊＊＊

「ああ、こんなところにいたのかねフラノワ君」
「お、お久しぶりです、教授」
森の中程まできた所で、やっと教授とやらに出会えた。私はアーニャと教授の顔が見える茂みに隠れて精霊さんたちと一緒に事の成り行きを見守っている。がんばれ、アーニャ。
第一印象としては『偉そう』これに尽きる。丈の短い赤いマントに隠れて上着は見えないが、下はきれいにプレスされた黒のスラックスで靴は同じく黒の皮靴だった。アーニャの質素な生成のワンピースとボレロとは大違いである。私はといえば、小屋を出る時に時間も服もなかったのでとりあえず部屋着の上にアーニャのマントを羽織っただけだ。
「休暇は構わないが、どこへ行ったのかわからなかったから探してしまったよ」
「それは、お手数をおかけして申し訳ありませんでした……」
「いやいいんだ。そろそろ休暇も終わる。どうだい、一緒に帰らないかね？」
「いえ、あの……私、」

がんばれ。
（がんばれー）
（れー）
（アーニャー）

「わたし、助手を降りさせていただきたいんです」
「……そうなると、弟子の件も紹介できなくなるがいいのかね？」

「はい。構いません」
「もしかして彼が何か失礼でもしたかね？　それならまた別の人を探してこよう」
「いえ、そういうわけではないのですが」
「では、君は私が骨を折って探してきた弟子候補を自分の都合で断るというのかね？」

二人が何を話しているのかは全くわからないが、段々とアーニャの顔色が悪くなり、おっさんの方は憎たらしい笑みを浮かべ始めた。
あいつ、なんなの？
（いつもいつもいじわるするの）
（アーニャ悲しそうなのー）
まじか。悪い奴だな。
（くるなー！）
そうだー！　どっか行けー！
（そうだそうだー！）
私は存外アーニャが気に入ったのだ。
自分の思っていることをはっきり言えない人間はあまり好きではないはずなのだが、彼女はそれでも『教師になりたい』と私に告げた。それだけはっきり言えれば十分だ。
あのおっさん、早く諦めてくれないかな。
（そうだー！）
黒い子たちがわーっと飛び出した。
え、何々？　どゆこと？
「＊＊＊！」
やば。見つかった。
おっさんは明らかに私の隠れている茂みを見ている。
普通の人には精霊さんは見えないんじゃないのかちくしょう。
アーニャの顔色が変わった。マジゴメン。視線で謝りながら仕方なく出ていくと睨まれた。アーニャが。

「ふん、子供か。彼女はいったい誰だね？」
「あ、ええと、旅人らしいです。昨日知り合って……」
「ほぉ？　そんな暇があるのなら弟子の一人でも自力で見つけたらどうだね？」

今すぐ！　こいつの言ってることが分かるようになって文句を言えるだけの能力が！　あればいいのに！
（あげるー）
うん？
一瞬、目の焦点が合わなくなった。
なんだろ、今の
「そ、それは、」
「まぁなんにせよ、詳しい話は戻ってからしようじゃないか。こんな所でいつまでも立っているわけにもいかない」
あ、れ？　何を言ってるのか解るようになった。え？　なんで？
（大陸言語だよ）
（話せるよー）
今の精霊さんの言葉が聞こえたのか、アーニャは驚いたようにこちらを見ているがそれがさらにおっさんの癪に障ったらしい。
わかってるよ、アーニャ。それは私に助けを求める視線ではなく、何もしないでくれという目だね。わかってるよ。おとなしくしてるよ。しかしこのおっさん早く帰ってくれないかな。
「フラノワ君」
「わ、わたし、戻りません。……弟子は自分で探します」
震える声で、手のひらをきつく握りしめて、アーニャははっきりと言った。
「フラノワ君、わかっているんだろう。今の君では無理だよ。せめて研究機関でなにがしかの成果を上げて名を知られるようになってから――」

あのおじさん、なんでそんなにアーニャに執着するの？
「それはもちろん、フラノワ君の才能が惜しいからだよ」
突然、おっさんは私の疑問に答えた。
アーニャはぎょっとして私とおっさんを見比べている。
「教師になるだと？　バカバカしい。そんなことよりも世の中の為にもっと研究をするべきだ。フラノワ君なら、ヘリを超えることだって」
人の夢を捕まえてバカバカしいってどういうことよ。教授がそんなに偉いっていうの？　人の夢を笑うなんて、
「……いりません」
おっさんの言葉と私の思考を遮って、アーニャの低い声が響いた。
精霊がアーニャの声に従って、彼女の周りを取り囲む。
「名誉も結構です。そんなに研究がお大事なら差し上げます。その代わり、もう私に構わないでください」
「しかし、君は研究職に就くべきだ」
尚も言いつのる教授とやらに元上司が重なって見えて、むなくそわるい。
「それはあなたに考えていただくことではありません」
「ヘリだって、君が教師になるなどと言ったら反対したんじゃないのかね？」
「師匠は私が教師になりたいと言ったら、がんばりなさいとおっしゃったんです」
「しかしだね、」
もう駄目だ。我慢できない。アーニャには後で謝ろう。
「満足でしょう？　あなたに差し上げるとアーニャは言ったの。何をしてたのか知らないけど、その研究とやらはあなたのものよ」
たぶん、もう、それ以上のものはあなたには作り出せないでしょうけど。
精霊さんが私にまとわりつく。不思議と不快感はない。
「もう、アーニャに構わないで」

世界が、歪んだ。
「……はい」
おっさんはそう言ってくるりと踵を返すと、来た道を戻って行った。
え？　なに？　帰ってくれた？　の？
アーニャはその場にへたり込んでいる。どうしたんだろう。
「アーニャ、大丈夫？」
「モトコ、あなた、ことば、いいえ、それよりも精霊術を……」
アーニャは困惑したように私を見上げている。
（大陸言語、使いたいって）
（だからあげたのー）
（アーニャに意地悪する人きらーい）
（僕もきらいー）
（だからもう、アーニャのこと知らないよー）
（構わないよー？）
「結局どういうこと？」
精霊さんたちの話すことはいまいち要領を得ない。はっきりしているのは私が大陸言語を話せるようになって、あのおっさんが帰って行ったということだけだ。
アーニャは彼らの言っていることが理解できたらしく、小さく頷いて立ちあがった。
「モトコ、あなたは精霊術を使ったのよ」
「精霊術？　魔法とは違うの？」
「魔法、というのは魔術と精霊術を総称する言葉よ。最近はあんまり使われないんだけど。ええと、それで、精霊術はさっきみたいに精霊さんが力を貸してくれる術のことよ。魔術は、精霊さんを使役する術」
「違いがよくわからない」
「精霊術は精霊さんと仲が良かったり、好かれていたりしないと使えないの。魔術は手順さえ踏めば誰でも精霊さんを使役できるのよ」

「……友達に手伝ってもらうか、お金出して人を雇うかってこと？」
「そうね」
私の表現がおかしかったのか、アーニャはくすくすと笑った。
「私が大陸言語をしゃべれるようになったことも、あのおっさ、教授が帰ったこともその精霊術のおかげってこと？」
なら、術が解けたら話せなくなってしまうのか。
「ええ。それと精霊術と魔術の違う所はいくつかあるんだけど、精霊術は術者が解くか精霊さんに嫌われるまで続くわ。対して魔術は術者が提供した魔力が尽きるまで続くの」
給料分の仕事しかしませんよってことか。なかなかにドライで私は好きだな。
アーニャは話しながら寝泊まりしていた小屋の方へと歩き出した。心なしか表情は明るい。
「アーニャ、ごめんね」
「え？」
「出しゃばるつもりはなかったんだけど、どうしても我慢できなくて……、ごめんなさい」
「いえ、こちらこそありがとう。モトコがいなかったら私、きっと連れ戻されていたわ」
いい子だよー。
可愛くて綺麗でいい子で胸おっきくて天才魔術師で料理上手、嫁ぎ先には困らないだろうなぁ。
あ、今嫌な奴の顔を思い出した。気持ち悪い。嫌だ、と思うと芋づる式にあいつの部屋の扉を開けたところから思い出してしまう。嫌だ、嫌だ。気持ち悪い。
「さっきのおっさんが私に気付いたのって、精霊さんたちが向かっていったから？」
頭の中の映像を振り払うように私はアーニャに話しかけた。
「ええ。精霊さんの気配を感じることができるのは魔術師としての素質の一つよ」

「ふーん。でも、術って防げないの？　あの人もろに術にかかってたよね？」
「モトコが術を行使するような動きもなくて、その、若い見た目もあって油断したんだと思うわ」
油断大敵って本当なのねぇ。
「今年も、ダメだったなぁ……」
寂しそうに笑ってアーニャはうなだれた。
母校で教鞭をと願うアーニャに協力してあげたいとも思う。けれど、知り合いもいない土地では弟子を探してあげることは難しい。
私の方が誰かに面倒を見てもらわないと生活だってままならないだろう。
ん、あ、そっか。
「私がアーニャの弟子になればいいんじゃない？」
「え……？」
「二人でやれば早いと思うし、帰るためにも私が魔術をつかえたほうが何かと便利なんじゃない？」
「そ、う、かもしれないけど、……だめよ。モトコにそんなこと、私が巻き込んだのに」
そうは言うがアーニャががんばってくれている間、私だけニート生活を送るわけにもいかない。
「それに、私が教師になりたい学校に入学したら４年間は学生として生活してもらわなくちゃいけないのよ？　モトコはそんなに待てるの？」
「待ってる人もいないしねぇ」
両親も彼氏も友達もいない。一番仲の良かった友達は、元彼の浮気相手だ。やってられるか。
「ちょうどどっかに旅行にでも行こうかなって思ってたところだからいいのよ」
「４年も？」
「居ちゃ悪い？　生活費くらいは自分で稼ぐわ」

「そういうことじゃなくて、早く帰りたいんでしょう？　そんなことをしている場合じゃないわ」
「なら、アーニャは４年後には確実に私を元の世界に帰せるっていうの？」
「それは、わからないけど……」
「何か、していたいのよ。ただ待ってるだけなんて私は嫌なの」
不安になる。知らない土地で、言葉は通じるが頼りになる人もいない。常識もお金も住むところもない。いつ帰れるかもわからない。捨て犬だってもう少しマシだ。
「モトコ……」
「お願いよ。もしも帰る方法が見つかっても、４年間は帰らないから。アーニャが教師になれるまで協力するから」
「でも、」
「お願い、アーニャ」
不安で、どうしようもない。しゃべっていないと泣いてしまいそうだ。
なんだって、こんなところで泣かなくちゃいけないのか。　嫌だ。泣くのは嫌だ。不安なのも嫌だ。
見知った世界に帰りたい。一人でも生きていける世界に帰りたい。でも、かえりたくない。
「……わかったわ」
そうして、しばらく私とアーニャは道の真ん中で立ち止まって見つめあっていた。折れたのはアーニャだった。
「さっきの言葉にウソはないわね？」
「何があっても４年間、アーニャの弟子としてがんばる」
帰れるように。帰りたいと思えるように。
「私も責任を持ってあなたを元の世界に帰せるように、努力するわ」
アーニャは大きく息を吸って、精霊さんに呼びかけた。
「これから、師弟の契りを結びます」
（はーい）

「手を出して」
差し出された手を握ると、アーニャは泣きそうな顔で「本当に、いいのね？」と聞いてきた。
アーニャは泣き虫ね。
妹がいたらこんなかんじなのかなと思いながら私は笑って「もちろん」と言った。
「これからよろしく」
「こちらこそ、よろしく」
少しだけ、泣きそうだった。

いつだって、誰かに頼って生きてきた（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます。

猫にマタタビ、女郎に小判

風船から空気が抜けるような音がして、コップの中の金色の液体は泡立った。同時に周囲には草の匂いと何かが焦げた匂いが漂う。

焦げには発がん性物質がどうのこうのとかいう話、最近は聞かないよなぁ。あれって何トンか摂取しないとそうはならないとかなんとか聞いた気がうふふ。泣きそう。

「美味しくはないけど、ええと、その、がんばって！」

正直だな、オイ。

今私の目の前には、髪と目の色を変えるという飲み薬がコップになみなみと用意されている。

帰りの道中で『師弟の契り』とかいうお嫁さんごっこみたいなことをした後、私たちは朝目を覚ました小屋に戻ってきていた。見た目をちょっと変色させたら買い物に行こうというのだ。そのための薬をアーニャが用意してくれたのだが、見た目は冒頭の通りである。アーニャは自分の分だという黒い液体を飲み干して数分も経たないというのに、すでに瞳の色は金から赤へと変わっていた。金髪赤目がこの国の大多数だっだっけ。

「……」

金箔入りの飲み物だと思えば、いける、かな？　いや無理だな。

「さ、早く」

「……っ」

ええい、女は度胸だ。

右手にコップを持ち、左手で鼻をつまんで、目を瞑って一気に流し込む。

「うぇぇぇぇぇ」

舌がじんじんして鼻に抜ける匂いはどう考えても焦げた部分。これを１０日に一度は飲めっていうのか。

口直しにと手渡された水を飲み干して、帰ってきた時と同じよう

に旅行用だというマントを羽織った。
　ところで私、何色になるんだろう？

＊＊＊＊＊

「私の行きたい学校は、ヴィアン国の首都ヴァーウェンにあるヴィアン魔術学校というの」
　ざくざくと整備されていない道を町へと向かいながらアーニャは今後の計画について話し始めた。
「ビアン。国の名前と同じなの？」
「ヴィアンよ。国の名前を冠しているその名の通り、国立なの。建国時代から続く由緒正しい名門校よ。相応の実力がないと入学できないけれど、卒業すれば国を問わずエリートの道が約束されているわ」
「進学校、なの？」
「世間一般的にはそうかもしれないわね」
　聞いてない。進学校に入学するだなんて聞いてないよ？　アーニャの母校だっていうから油断した……。いや、天才だって聞いたような気もする。うう。
「国立なのに国を問わずエリートになれるの？　他の国は納得するの？」
「納得はしていないかもしれないけれど、この大陸で一番歴史のある学校だもの。信頼はされているわ。それにね、ヴィアン魔術学校が『才能の有る者には広く門戸を開くべし』という理念の元で運営されているから、私やモトコでも入学できるの。他の魔術学校はほとんどが家柄で入学を拒否するところばかりだから……」
　恐らくその聖人君子のような理念は他の国のように身分で差別しないことで、より優秀な人間を自国の配下に置きたいというのが本音なんじゃないだろうか。エライ人の考える事なんて知らないけど。
「家柄？　この世界は誰でも魔術が使えるのよね？」

「ええ。魔術師としての素養は血筋に寄るところが大きいの。今までの歴史の中で平民出身の大魔術師が存在しなかった訳ではないんだけど、ね」
　言葉を濁して、アーニャは腰から下げた棒のようなものに軽く触れた。
「ヴァーウェンまでは歩いて一季（ひとつき）くらいかかるから、町で準備を済ませたら明日か明後日には出発しましょう」
「一月（ひとつき）もかかるの？」
「ええ。路銀を稼ぎながら移動するの。その間にモトコには魔術を学んでもらうわ」
　進学校ってその程度勉強すれば入れるものだったっけ？　高校時代、大学進学を決めた友達はもっと勉強してた気がするんだけど、あれは気のせいだったのかなぁ？
「大丈夫。精霊術が使えることは確かなんだし、あとは魔力の練り方と制御方さえ覚えればなんとかなるわ」
「まぁ、アーニャがそう言うならそれでいいけど……。ね、もしかして『お師匠様』とか呼んだほうが良いの？」
　からかい半分に問うとアーニャは赤くなって勢い良く首と手を横に振った。
「そ、そんなっ！　今まで通り『アーニャ』でいいわよ」
「二人のときはそれでいいかも知れないけど、一般的な師弟ってそういうものなの？」
「お弟子さんは自分の師に当たる人を『（お）師匠（様）』とかもしくは、その、例えば、だけど、『アーネッカ師』と呼ぶことは、あるけど……」
　自分の名前を例にするのを照れているらしく、アーニャはもごもごと教えてくれた。
　先生を目指してるくせにその程度で照れるのか。可愛いなぁ。
「私は他の魔術師のことはなんて呼べばいいの？」
「弟子のいるいないに関わらず、魔術師は家名でお呼びするのが一

般的よ。私なら『フラノワ師』ね」
「他の先生のこともそう呼んだ方がいいのよね？」
「ええ、そうよ」
（あのねー、アーニャはアーネッカ師って呼ばれたいんだよー）
（憧れなんだってー）
（でも恥ずかしいんだってー）
「だ、だめだめ！　言っちゃだめー！　聞いちゃだめー！」
へぇ。さすが精霊さん、よく知ってる。ならば一番弟子としてその期待にお応えしましょう。
「それじゃ、早く行きましょうかアーネッカ師？」
「も、もぅ、モトコったら！」
金色に染まった自分の髪に違和感を感じながら、私は町へ足を踏み入れた。
町は昼時ということもあってか、それなりに賑わっていた。市場の立つ時間を過ぎているから、これでも人は少ない方らしいがそれでも夕方のスーパーくらいの活気はあると思う。
行き交う人々は様々な格好で、アーニャのようなワンピースや、Tシャツにパンツのようなラフな格好の人もいれば、腰から剣を下げた銀に光る鎧の男の人、エプロンをつけたままのおばさんや皮製のベストの少年もいた。殆どの人は金髪で、石畳とレンガ造りの町並みからは中世のヨーロッパのような印象を受ける。これじゃぁ確かに私の黒髪は目立っただろうな。
お昼ごはんは朝も食べたナンっぽいものに、これまた野菜（水色だった）っぽいものとか肉（緑色だった）っぽいものを、クレープみたいに巻いた食べ物だった。サンドイッチに近い気がする。色はともかくうまい。
「どこで買い物するの？」
「ギルドの近くに、冒険者が要らなくなった物を売り買いしているお店があるの。そこで揃うはずよ」
ギルド？　冒険者？　またなんかファンタジーな単語が出てきた

気がする。ええと、確かアレだろ？　ギルドって日雇い派遣斡旋所だろ？　冒険者、はそこでお世話になってる人か。フリーターとか呼んだら怒られるのかな。やっぱり色々違うんだなぁ。

木の扉を押し開けると皮や油、金属の匂いの入り混じった独特の匂いが漂ってきた。壁にはずらりと剣や鎧が飾られ、棚には靴や鞄、アクセサリーなんかが所狭しと並べられている。私たちの他にお客さんはいないようだった。

「いらっしゃい」

「こんにちは。あの、この子の服を探しに来たんですけど」

「冒険者志望かい？」

「いえ、王都まで行くので丈夫な服が欲しくて」

「それなら、これなんかどうだい？」

店員さんとアーニャがあーだこーだと選んでくれている間、私は物珍しさから店内をうろついていた。

とある棚に精霊さんたちが集まっている。不思議に思ってのぞいてみるとその棚の奥に無造作に置かれた白い毛玉が気になるようだ。手に取って見るとそれは巾着だった。外側に足の長い毛皮が使われているので毛玉に見えたのだ。袋を閉じる紐と裏地は晴れた空のような青色だった。

（きゃー）

（ふわふわー）

（もこもこ！）

（もふもふ！）

（わーい）

（さーらさらっなのー）

（すべすべー。すてきー）

巾着の周りをふるふると飛んだり、触ってみたり顔をうずめてみたりと、精霊さんたちは猫にマタタビ状態になっている。青い精霊さんと白い精霊さんが多いのは自分と同じ色だからかな。

（欲しいのー？）

（綺麗だもんねー）
お金ないし、ムリムリ。こういうのって高いんでしょう？　欲しいのは否定しないけど。
「おや、お嬢さんそれが気に入ったのかい？」
「いえ、その、こういうお店って初めて入るので珍しくて。すみません」
早口で店員さんに謝って、商品を元の棚に戻した。アーニャに呼ばれて店の奥へ入ると、そこは金属の匂いが濃い場所だった。
「武器はどうしたい？」
「ぶき」
銃刀法、とかないんだろうなぁ。さっき道ですれ違った人も帯剣してたし。それにしても、そんなに物騒なのか。困った。
「何か手に馴染んでるものはあるかい？」
手に馴染んだもの……包丁とか？　ペンはダメだし、掃除機？
じゃなくてもうちょっとまともなもの……あ、あれはどうかな
「バトン？」
言うと、アーニャと店員さんは疑問符を浮かべた。
やっぱりこっちにはないのかな。そもそもスポーツ自体あるのか？
（魔術戦ならあるよー）
（剣術大会とか）
（馬術！）
うん、なさそうだな。
「うーんと、このくらいの長さで、このくらいの太さの真っ直ぐな棒があれば、それがいいです」
そう言いながら、腕と指で長さと太さを指定する。
「棒術にはちょっと短いし細いと思うが、いいのかい？」
「はい、構いません」
「材質はどうする？」
「軽いものでお願いします」
軽い分には何か巻いたりすれば重くできるし。

店員さんは首を傾げながら、奥のほうから木の棒を出してきて腕の長さで切ってくれた。
あとで両端に石でもくくりつければおもりの代わりになるだろう。問題は私がバトンをやめてもう7年近く経ってるから上手く扱えるかということだ。ダメなら叩くのに使おう。そうしよう。
お金を払ってお店を出ると、今度は別のお店へと連れていかれた。
「私はちょっとギルドに用事があるから、その間ここで待っていてもらえるかしら？」
「うん、わかった」
人ごみに消えるアーニャを見送って、私は『貸本屋』と書かれた扉を押し開けた。薄暗い店の中は、本の密集地だった。人が一人どうにか通れるだけの通路の両側には私の背よりもはるかに背の高い本棚が並んでいる。
さて、何を読もうか。魔術、はアーニャに教わるから、この世界の基本的な成り立ちとか歴史がいいかな。
「こんにちは、何かお探しですか？」
入り口で立ち止まっていたからか、店員さんが近寄ってきた。
「ええと、歴史とか精霊さんについての易しい本を探しているんですが、どのあたりにありますか？」
「そうですね、この辺りはいかがでしょう？」
店員さんはニッコリと笑って店の入口近くの低い段を教えてくれた。背表紙には『ようせいさんといっしょ』『つよいぞヴィアンおう』などと書かれている。うん？
「文字を覚えたてのお客様はよくそちらを借りていかれますよ」
やっぱりそういう方向ですよねー。識字率がどの程度なのかは知らないが、覚えたてだと思われたのか。内容的には合っているだけになんとも言えない。
「ありがとうございます」
「また何かありましたらお声をおかけください」
「はいー」

しばらくその辺りの本を見比べていると、アーニャが戻ってきた。
「お待たせ。いい本はあった？」
「うーん、これとか。……ほら、私って常識無いから、こういう誰でも知ってそうな話を読んだほうがいいかなって思って」
差し出した本のタイトルを見て首を傾げたアーニャは私の説明に納得したように頷いた。
「それならそれがちょうどいいと思うわ。すみません、この本お願いします」
手続きを済ませてアーニャに引きずられるように帰路についた。小屋へ戻ってから買ってきた荷物を解くと、私がリサイクルショップで見ていた白と青の巾着が入っていた。目ざとい精霊さんたちがわっと寄ってくる。
（さらさらー）
（やーん、きもちー）
（すべすべー）
（きゃふー）
「アーニャ、これ」
「それ、良い物見つけたわね、すごいわモトコ。ケンヌの毛皮とムーメイティ人の髪で作ったお守り袋がたったの５００ガルなんて、そうそうないわよ！」
「え、なにそれ」
確かに綺麗だなって思って見てたけど。……今、髪って言った？
まさかこの紐と裏地って、人の髪でできてるの？
「ケンヌは『風の御使い様』とも言われる動物で、ムーメイティは水の国よ。この２つの素材は『風』と『水』の代表的な術具なの」
じゅつぐ？
（術を使うときに使う道具のことだよー）
肌触りを存分に堪能しながらの解説ありがとう。
「そういうのって高いんじゃないの？」
「もちろん本物は高いわ。でもこの素材は代表的なだけに模造品も

多くてね、これもそうだと思われてたみたい。得したわね。これはモトコのものよ」
「そんなにいいものならアーニャが使いなよ」
「見つけたのはモトコだもの」
「でも、本を借りたり服を買ったりしてもらったから……お金かかったでしょう？　稼げるようになったら返すから」
「気にしないで。いつか弟子ができたら使おうと思って貯めていたから大丈夫よ。そんなに贅沢もできないけど、これ位は贅沢に入らないわ」
嬉しそうにそう言われてしまうと、反論する気も失せた。
そんなに弟子ができて嬉しいのか。そうだよなぁ。お金は後でどうにかして稼いで返そうと思ってたけど、受け取ってもらえなさそうだなぁ。
明日にはここを発つというので借りてきた本を読んでいる間に晩御飯ができていた。ピンク色のシチューみたいな食べ物はやっぱり美味しかった。
ベッドが一つしか無いので二人揃って潜り込む。一人用のベッドは狭かったけれど身近に人の体温を感じられてなんだか嬉しかった。
「おやすみなさい」
「おやすみなさい」
（おやすみー）
（おやすみ）
（おやすみなさーい）
アーニャは良い匂いがした。こういう生活、なんて言うんだっけ。
……ヒモ？

猫にマタタビ、女郎に小判（後書き）

閲覧、お気に入り登録、ありがとうございます。

練習百遍（前書き）

閲覧、お気に入り登録、ありがとうございます。
今回はいつもに増して設定の説明ばかりです。すみません。

練習百遍

「モトコ！　行ったわ！」
「おおっけえぇえええいぃっ！」
目の前に現れた熊だか猪だかよくわからない緑色の動物の目のあたりに全神経を集中させる。鋭い目つきは肉食獣のソレだが、ビビってはいられない。今日の晩御飯がかかっているのだ。
「ね、む、れぇっ！」
ここ数日でやっと作れるようになった魔力をまき散らすと、精霊さんたちがそれに触れて目標へと飛んでいく。黒い月の精霊さんが眉間のあたりにとび蹴りをくらわすと、本日のメインディッシュは音を立てて後ろへ倒れた。
どうにかうまくできたようだ。やれやれと無意識のうちに握っていたらしい拳を解いて脱力すると、アーニャが木の根をひらりと飛び越えて駆け寄ってきた。
「すごいわモトコ、魔力を練る時間がうんと短くなってる！」
「でも、まだまき散らすことしかできないよ」
魔術は魔力を使って精霊さんを使役する術だからその魔力が精霊さんに、それも使いたい術に適した系統の精霊さんにきちんと届かないと発動したとは言えないのだ。今回は対象を眠らせたかったのだが、それができるのは月系統の精霊さんだ。そのため本来は月系統の精霊さんだけが魔力を受け取るように仕向けなくてはいけないのだが、そのあたりのコントロールがどうしてもうまくできないのだ。今も、私の魔力を受け取った赤や金の精霊さんたちが倒れた熊っぽいものをぺちぺちしている。
「それはモトコが呪文を省略するからよ。きちんと詠唱すればすぐに制御できるわ」
「いやよ、恥ずかしい」
教えてもらった呪文は「月の精霊に希(こいねが)う。我が魔力を代償に彼(か)の

ものを眠らせ給え」だった。精霊言語でこれを唱えると、月系統の精霊さんだけが魔力を受け取ってくれて効率良く術が発動するらしい。

らしい、というのはあまりの恥ずかしさに私が使用を断固拒否して一度も使っていないからだ。ちなみにアーニャのアレンジが入っているので、これでも短い方だそうだ。

「でも入学試験のときは唱えなくちゃいけないんだから、練習しておかないと」

「わかってるわよー」

呪文の詠唱も審査項目の一つのハズなのできちんと使えるようにならなくてはいけない。呪文だけは毎日アーニャが使うのを聞いているために覚えてしまったが、極力使いたくない私はどうにか省略できないかと悩んでいる。だって恥ずかしいし。

ちなみに術を唱える前に魔力を受け取ってほしい精霊さんに「受け取ってね」とお願いするのは、弟子の教育にならないためアーネッカお師匠様に却下された。楽なのに。

「詠唱は魔力を練るのと制御するのを一度にできるから絶対にその方が上達が早いのよ？」

口に出した方が五感に訴えることができるので集中力が増すのは確かだ。最初のうちは集中できなくて魔力を練ることにすら難しかったのだから、本当は口に出した方がいいのだろう。この世界の人間なら誰でも普段から帯びているはずの魔力は異世界人である私には皆無だった。曰く、生命力でもあるらしいのだがさっぱりわからん。わからないなりにアーニャの誘導にのればなんとかカスみたいなものが出るようになったのが六日前。時間はかかるものの一人で練られるようになったのが二日前。ついさっきの魔力だって、濡れた手を振ったときに水滴が周りに飛び散るのと変わらない程度だ。

「それにしても、今日は調子が良いじゃない。やっぱりそれのおかげ？」

「うん、朝これを回してたらなんか集中できた」

腰から下げたバトンもどきを指摘されて私は頷いた。
木の棒ではやはり軽すぎたので木の皮と石ころで重さを増したバトンもどきは最初こそうまく扱えなかったものの、数日練習したら体が思い出したらしくなんとか回せるようにはなった。綺麗に回せるだけで楽しかった頃を思い出して、柔軟でも初めてみようかなと血迷いながら、今朝も練習していたら一度だけ思い通りに回せたのだ。その時、なぜかアーニャが魔力を練るときの雰囲気を思い出したので、もしやと思ってバトンを回すように練ってみたら上手くいったというわけだ。
普段から雑念が多いだけなのかもしれないが。
「早く他の術も使ってみたいなー」
私に使用が許されているのは目下、月系統の術だけだ。得意な術の系統は体に宿している色によって大きく左右される。私が持っている色は黒だけなので、その色である月系統の術から練習することになったのだ。薬で変色させても精霊さんには元の色がわかるらしい。
「もう、まずは得意なのからって言ったでしょ？」
「はーい。そういえば、なんで他の色はだめなんだっけ？」
持っている色が得意なのはいい。基本的に精霊さんは自分と同じ色があると嬉しいらしく、その色を宿した人の魔力を受け取り易いのだ。
「魔力に色を込めるって、本当は難しいのよ。元々持っている色だったら術者が意識しなくても、魔力は使いたい術に適した色をしているわ。だけど色は本来、見るものではなくて感じるものなの。普段『見えて』いるものを『感じる』というのは難しいのよ。どうしても目に見える色が、それを感じることを邪魔するわ。私やモトコは精霊さんと触れ合えるからその感覚が養われているけれど、それを掴むには精霊さんをより深く感じることが不可欠よ。魔術師の素養として精霊さんの存在を感じることができなくてはいけないというのもこのためね」

その『見える』と『感じる』の関係性を言われるとそんなものかなとも思うが、元の世界で生活していた頃に当てはめてみるとこれだという具体例が思い浮かばない。第一印象が悪いとその後のその人への評価も低くなる、ということに近いのかもしれないが、なんだかしっくりこない。『感じる』という必要性がなかったからだろうか。

逆に視覚は思い込みや記憶によってゆがめられるという話を聞いたことがある。あれは確かテレビでそういう特集を見た時だったか。『こうだと思う』ことによって『見え方』が変わってしまうのだとか。その時はエッシャーってすごいんだなくらいにしか思わなかったけどもうちょっと真面目に聞いておけばよかったかなぁ。

色の感じ方にしても、ダイニングの灯りは蛍光灯の白よりも白熱灯のオレンジの光の方が料理がおいしそうに見えるとか、青は集中力が上がるから会社の内装や備品には青系のものが多いとかその程度のことしか知らない。

常識が通用しない。置き換えられる現象も思いつかない。随分と遠いところへ来たものだ。

いつ匙を投げられるかとヒヤヒヤしていたものだが、どうやらアーニャはやりがいを感じてくれているようだった。逆境に強いのは良いことだ。

アーニャは先ほど私が眠らせた獲物に近寄って呪文を唱えている。金色をした日の精霊さんたちがその獲物の体に巻きついて、ごきり、とその胸のあたりから生理的に恐怖を感じる音をさせた。急所を一撃で突いたのだ。最初はアーニャの外見とのギャップに驚かされたが、今では慣れっこだ。

アーニャが得意とする日系統の魔術はいわば物理系で、重い物を持ち上げたり今みたいに砕いたり折ったりすることができる。対して私が使う月系統は精神系で、対象を眠らせたり幻覚を見せて混乱させたりできる。

「さて、今日はこのくらいにしましょうか」

「はーい」
太陽もだいぶ傾いてきた。今は月季、月の出る時間が一番長い季節。私が召喚されてから、十日が経っていた。
この世界の暦は系統の数である6を基準として成り立っている。1年は6つの季に分けられて、1季は6つの節に分けられて、1節は6つの中で分けられているので、6×6×6で1年間は216日あり、それぞれ風、日、火、地、月、水の順に巡るのだ。元の世界の暦で言うと季は月、節は週、中は曜日に近い。例えば今日は月季日節地中だから、明日は月季日節月中だし、6日後は月季火節地中という具合だ。一か月が全て同じ日数だと思えばいいのでこれはまだ違和感なく受け入れられた。しかし、更に1季に一度はその系統のお祭りの日があるとか、休日は季によって変動するとか、お祭りの前後の日は休みだとか、そういった細かい所はまだきちんと覚えていない。カレンダーかスケジュール帳が欲しいところだ。
ぼんやりと復習しながらアーニャを手伝って今夜の野宿場所を確保する。私が最初に目覚めた小屋は、あの辺りの森がまだ未開拓だった頃に建てられたもので冒険者が自由に使える施設らしかった。そんな小屋がそうそう建っているわけではないので、最近はもっぱら野宿だ。
他の人間や獣が入ってこれないようにアーニャが結界を張ってくれている間、私は地面に火をおこすための魔方陣を描く。結界や灯りなどの場所を固定して効果を長く持たせたい術には魔方陣が効率的だ。術の規模と期間に見合うだけの魔力さえ渡せば、精霊さんがその魔方陣の上でごろごろしたりで遊んだり踊ったりしながら術を発動してくれるのだ。見ているだけで和むので私は気に入っている。
「描けたよー」
「はーい。……うん、もうすっかり魔方陣は上手く描けるようになったわね」
魔方陣なら恥ずかしい詠唱をせずともその中に色々と注文をつければ、あとはきちんと魔力を練るだけで発動するから必死に覚えた

のよ。とは言えない。
「アーネッカ師の教え方がいいからよ」
「！　も、もう……」
赤くなって恥ずかしがるアーニャはどうしてこんなにも可愛いのか。いつまでもこの呼び方に慣れないでいて欲しい。楽し、じゃなかった可愛いから。
「火の精霊に希う。我が魔力を代償に此処へ火を灯し給え」
魔方陣の上に両手をかざして詠唱しながら、その手のひらに魔力を練る。それははらはらと花びらのように落ちて火の精霊さんたちに触れると、彼らは魔方陣の上に降り立ってくるくると踊り始めた。精霊さんの足元から、燃料も無いのに火がおこる。アーニャの練る魔力はいつも綺麗だ。彼女は魔力を後から後から幾重にも生まれるように練る。大輪のバラのように、湧き水のように、繊細でキラキラしていて私はそれを見ているのがとても好きだった。
詠唱を終える頃には火が付いているのは経験の差か。あんなに綺麗で大量の魔力を一瞬で練るにはどれだけ経験を積めばいいのやら。
「そうだわ、さっきキアの実を見つけたの。もしかしたらモトコが好きなんじゃないかなって思って採ってきたんだけど……」
「キアの実？」
（酔っぱらいの実～）
（さっきのシャグもキア好きだよ？）
この正体不明のメインディッシュはシャグというのか。
「はい、飲んでみて？」
瓜のような形のピンク色の実にを半分に切ったのを丸ごと渡された。その切り口ににじむ汁ををちょっとだけ吸って口に含むと微かなアルコールが鼻に抜けた。あ、なんだろ、これちょっと懐かしい、この酸っぱさ、濁り、そう、これ、
「どぶろくっ？！」
ものすごい勢いで食いついてしまった。それにしてもうまい。実ってことはこれは植物？　庭に植えたい。

「ふふ、やっぱりね。モトコ、お酒好きでしょう？」
「うん！　ありがとう！」
久しぶりのお酒が疲れきった体に染みる。私たちは最初の町を発ってからずっと森の中を進んでいたため、最初の夜以来お酒を飲んでいなかった。木の実やお肉を現地調達しているので頻繁に町へ立ち寄る必要もないのだ。洗濯やシャワーも魔術で行えるし、なによりサバイバル生活は私の修行には持って来いだった。今では小動物程度なら捌ける自信もある。ただ、夜は冷えるようになってきたのでそろそろふかふかのお布団が恋しくもある。
「あと2、3日したら町へおりましょうか」
そんな私の心を知ってか知らずか、アーニャが獲物を解体しながら言った。こういう大物の作業はまだまだ手伝い程度しかできない。
「ホント？」
「ええ。薬草とか毛皮とか、結構溜まってきたからそろそろ売ろうと思って」
アーニャは効能のある薬草や倒した動物から剥いだ皮や牙を、私に用法なんかを教えてくれながら採取していた。それを売ろうというのだ。
「甘いものでも食べましょう？」
「やった！」
甘いものは果物ぐらいしか食べていなかったから、甘いものと聞いてテンションが上がる。この世界の食べ物はどれもおいしい。中でもアーニャの作る料理は野外にも関わらず絶品だ。教わりながら作ることもあるのだが、知らない味ばかりでなかなかさじ加減が上手くいかない。
いつの間にか、夜空には丸い金色の月が浮かんでいた。

練習百遍（後書き）

今回の話で軽く説明したものは後の話で補足を入れていく予定です。
どうか悪しからずご了承ください。

日の都、ヴァーウェンへようこそ

右手首の周りを一回転、二回転、背後で左手に持ち替えて左手首の周りを一回転、二回転。
このバトンもどきもだいぶくたびれてきた。
「うーん、まだスムーズにはいかないなぁ」
「そんなことないわ、とっても上手よ」
「バトンの話じゃないわよ？」
「魔力もバトンも、両方よ」
少し離れた所で自分のことのようにうれしそうに笑うアーニャの足元には私が一人で仕留めた鳥（と植物をかけ合わせたような動物）が三羽ほど横たわっている。
ここはもう王都ヴァーウェンにほど近い街道だ。今までの山道とは異なりそれなりに整備されていて空間が十分取れるしあまり人も通らないので私も気兼ねなくバトンを振り回している。
鳥の足を紐で繋いで背負うと、私たちは街へと歩き出した。
今日は水季風節水中、辺りはすっかり寒くなっていた。

＊＊＊＊＊

まだ朝も早いというのに、市場は活気に溢れていた。
「クスンが５つで８００ガルだ！　安いよ！」
「朝ごはんにカイヤの実はいかが？」
「フォインから届いたばかりのアルバだよ！」
アーニャは人と人の間をすり抜けるようにして進んでいく。一方、こんな人ごみに慣れていない私は人に溺れながら進む。近所の夏祭りだってこんなに人はいないぞ。ちくしょう。
「あ、アーニャ、ちょっと、待って、」
まずい、はぐれる。

精霊さんに頼もうにも、こんなに人がいては他の人の思いと混ざってしまうのか、聞こえないらしい。
「アーニャ」
まずいまずいまずいまずい。焦る間にアーニャの姿は見えなくなってしまった。２４歳の迷子とか洒落にならない。
立ち止まるわけにもいかないが、きっとすぐにアーニャが気づいて戻ってきてくれるだろうからこの辺りから離れるわけにもいかない。人の流れから外れて狭い路地へ逃れる。背伸びをして見回してみても、アーニャに気がついてもらえるだろうか。この世界の人は私からすると大きい。１７０近くあるアーニャだって女性としては平均身長くらいだ。
（起きてよー）
「うん？」
声のした背後を振り返ると、薄暗い路地の先に藁を積んだ荷台が見えた。先ほどの声はそこに集まっている精霊さんのもののようだ。なんだろう。
（ねー、起きてー？）
（遊ぼうよー）
どうしたの？
ここから離れるわけにもいかないので心のなかで強く呼びかけると、数人がふよふよと寄ってきた。
（シュラが起きないの）
（のー）
（モトコ、起こしてー）
シュラ？　その藁の中に誰かいるの？
（早く起きないと売られちゃうの）
（シュラ売られちゃう）
（でも起きないの）
（起こしたげて）
（おきなーい）

うぇ、人身売買か。できれば関わりたくないなぁ。
（見張りはいないのー）
（いるけどいなーい）
（こーしょーちゅーだよー）
（なになにー）
（お買い得なんだって）
（でもでも難航ちゅー）
そう、逃げるなら今ってわけか。市場を歩く人は精霊さんの声にも私にも気づかない。……あぁ、もー。そういうのはガラじゃないんだけど、しょうがないな。ここまで聞いたら引き返せない。
人が来たら教えてね！
（わかったー）
（やるやるー）
あれ、なんかいつのまにか精霊さん増えてないか？　まぁいいや。
フードを深く被って、足早に荷台に近づいた。なるべく目立たないように中腰になって藁をかき分けると、端正な顔立ちの４０代前半くらいのおじ様の顔が現れた。水色の短髪に傷一つ無い滑らかで陶器のような青白い肌、深くはない皺が渋い印象を抱かせる。やだ、イケメン。じゃなくて。この人がシュラさんね。
（そうなの）
（起きないのー）
うん？　なにこれ？
シュラさんのすぐ側に丸くなって眠っている月の精霊さんがいるのだが、おかしなことにその額には糸のようなものが付いていて、二人の額はその糸で繋がっているのだ。これ、魔力の糸よね？
（モトコー）
（来るよー）
（きちゃうよー）
まずい。ええい、魔力の糸なら魔力で切れるだろ。
えい。と指先に込めた魔力で二人の糸を絶ち切って、急いで元の

場所へ戻った。
「モトコ！」
「アーニャ！」
「よ、よかった〜！　突然いなくなるから私、わたしっ」
半泣きのアーニャに抱きしめられながら、私は後ろから聞こえた木の軋む音が気になっていた。ここから早く離れなくちゃ。
「ごめんね、早く行こう？」
今度ははぐれないようにと手を差し出すと、アーニャは嬉しそうに手を繋いでくれた。
心配かけてごめんね。
「ええ」
去り際にちらりと路地の奥を見ると、壁に手をついてしゃがみ込みながらもこちらを見ている壮年と目が合った。灰色の瞳を見なかったことにしてアーニャにもう一度ごめんねと謝った。
良かった、大丈夫だったみたいだ。あとはまぁ本人がなんとかするだろう。無責任でごめん。他の荷物に紛れさせて運んできたってことは、この世界で人身売買は悪いことなんだろう。もうこれ以上は関わりたくない。アーニャに迷惑をかけるわけにもいかないし。
市場と住宅街を抜けた街の外れに、その木造の家はひっそりと建っていた。なかなかに荒れていて長いこと人の手が入っていないのがわかる。蔦が絡まった外見はお化けか魔女でも住んでいそうだ。お前たちがそうだろうとでも言うように頭上で鳥がぎゃあと鳴いた。
「着いたわ」
「ここ、がそうなの？」
「ええ、小さいけれど二人で住むには十分よ。さ、入って」
アーニャが扉を開けると、意外にも中の空気は澄んでいた。私の驚いた顔に気づいたアーニャが笑った。
「すごいでしょう？　これ、ヘリお師匠様のオリジナルの術なの。扉の取っ手に魔方陣が組み込んであって、そこに魔力を注げば掃除いらずなのよ」

それは一体どういう仕組みなのかものすごく気になる。さすが、アーニャが尊敬してやまない大魔術師、ヘリお師匠様だ。彼はアーニャのお師匠様で、この家の元持ち主でもある。今の持ち主は勿論アーニャだ。

「部屋、どこを使えばいいの？」

「こっちよ。私のお下がりで悪いんだけれど」

「アーネッカ師の弟子なんですから、いいんですよ」

「そう、ね。さ、ここよ」

玄関ホールを出てすぐ左の廊下の左手のドアが私の部屋らしかった。アーニャの部屋は廊下を挟んで向かい側だ。

「わぁ、広い！　それに、街がよく見えるのね」

「ええ、水時間は街の灯りがとっても綺麗に見えるの。さ、荷物を整理したらお茶にしましょう」

「うん」

荷物の整理と言っても大したことはない。マントと鞄とバトンをベッドの上、空っぽのクローゼットに服を詰めたらおしまいだ。

玄関を入ってすぐ正面には客室、右の廊下を進むと台所やお風呂があった。ダイニングキッチンにはすでにアーニャがいて買ってきた食材や食器を片付けていた。

「もう終わったの？」

「アーニャこそ」

「私は荷物が少ないから……はい、熱いから気をつけてね」

「ありがとう」

アーニャの向かいの席に腰を下ろしてすっかり見慣れた赤いお茶を一口すすると、体の中がじんわりと温まった。

机の上には金色の紐で止められた紙束が2つ転がっている。

「これなに？」

「学校からのお手紙と、……兄弟子様からの、お手紙よ」

アーニャが道中、町へ立ち寄るたびに学校へ手紙を出してなるべく早く試験を受けられるように手配していたのは知っていたが、も

う一通は何の用かわからない。けれども『兄弟子』その言葉にピンと来た。顔がにやけるのをカップで隠して私は聞いた。
「へぇ、そういえば兄弟子様ってどんな方なの？　この国の貴族で、偉い騎士様なんだよね？　この街にいたりするの？」
「え、ええ、そう、そうよ。この街にご家族でお住まいなの」
　みるみるうちに真っ赤になってアーニャはちらちらと手紙を見ている。今すぐ開けたいんだろうなぁ。開ければいいのに。
「じゃぁどこかでお会いするかもしれないわね。なんてお名前だったかしら？」
「トルイッシュ・マグダナル様と言うの。とても、その、ええと、すてきな、かた、よ？」
（トリスー？）
（やさしいよー？）
「ええ、そうよ。やさしいかた、だわ」
　カップを持つ両手は微かに震え、水面にはさざなみが立っている。実に楽しい。じゃなかった、可愛い。
　見ての通り、アーニャは兄弟子であるトルイッシュ様のことが好きだ。最初に兄弟子の話を聞いた時もこの調子で大したことは聞けなかったが、同じ街にいるのならぜひこの目でどんな男か確かめなければ。私の目の黒いうちはどこの馬の骨ともわからない男にアーニャはやらん。
（やらーん）
（うまのほねー）
　まぁ、精霊さんからの評価は軒並み良いから心配はしていないが、友達が知らない男に取られるのはなんとなく寂しいじゃないか。
「そ、それより、大事な話があるの！」
「うん？　なに？」
「あ、あのね、その、今まで薬で変えてた髪と目の色のことなんだけど……」
「うん？」

そう言う今もアーニャの目は赤だし、私の髪は金色で目は赤だ。
「その、入学するには元の色を申告してその色で過ごさなくちゃいけないの。それでね、その」
「え、ほんと？！　やった！」
「え？」
あのまっずい薬をもう飲まなくていいとか嬉しすぎる。
「で、でも、意地悪されたり、悪口を言われたり、もしかしたら酷い目に遭うかもしれないのよ？」
それは、今までそういう目に遭ってきたということなのか。考えてみれば、進学校に一色しか持たない人間が入ったなんて、他の人からすれば面白いはずもない。
「でも、元の色でないと入学できないんじゃないの？」
「そう、そうなの。だから、その、……やっぱり止めても、いい、のよ？」
「アーニャ？」
手を伸ばして、向かいでうつむいているアーニャの顔を無理やり上げさせる。
「とっても、嫌な目にあう、のよ……？」
瞳いっぱいに涙を溜めるアーニャの頬に手を添えて、親指でそっと涙を拭った。
まったく、アーニャったらすぐ泣くんだから。
「ちょっと、バカにしないでくれる？」
「うえ？」
「アーニャは１３歳のときに入学して１６歳で卒業するまでそれに耐えたんでしょう？」
他の人が皆１５歳で入学するところを、アーニャは最年少で入学したと聞いた。それならば風当たりも殊の外強かっただろう。
「なら、２４歳の私がたかだか１８のクソガキ共の可愛いいたずらに耐えられないはずがないじゃない」
勢い余ってこちらが可愛がることはあるかもしれないが。

「それともアーニャは私がその程度で音を上げると本気で思ってるの？」
「うう、ううん。……モトコは、モトコは、大丈夫」
「当たり前でしょ」
正直、ちょっと怖い。でもきっと、大丈夫。大丈夫だと思ってれば大丈夫。だって、アーニャがいるもの。
「お師匠様がしてくださったみたいに、モトコのこと守れるように、私がんばる！」
「それは特に期待してない」
「えっ、えぇっ！」
「アーニャはアーニャなりにがんばればいいのよ。ね？」
アーニャが先生になれるようにがんばってたら、私もきっとがんばれるから。
「モトコ……」
「あーもう、また泣く。そんなに泣いてると、私が先に手紙開けちゃうからね！」
言いながら目の前で封を解く。
「へっ？！　あ、だ、だめー！」
「えーと？　アーネッカ・フラノワ師、ならびに一番弟子モトコ・ウルシバラ殿、教員試験日を水季日節火中に決定致しましたので、当日の火時間までに本校へお越しくださいますようお知らせ申し上げます。だってさ」
「え、あ、あぁ、ええ、そっちね。うん、えと、三日後ね」
結構急だな。もう少しのんびり出来るかとも思ってたんだけどなぁ。一年が終わる季と、学校の一年が終わる季が同じく今季だそうだから、仕方ないのかな。元の世界だと１２月に卒業式、１月に入学式があるってことか。うーん、それは忙しそうだ。
「なぁに？　兄弟子様からのお手紙開けちゃダメだったの？」
「そ、そんなこと、ないけど、でも、その、」
「冗談よ。なにか大事な用事だと相手に迷惑がかかるし、早く読ん

だら？」
「え、ええ……」
アーニャは恐る恐る手紙に手を伸ばして神妙な手つきでそれを開いた。
一行読む毎に赤くなったり笑ったり困ったりと、恋する乙女は見ていてとても可愛らしい。これについては精霊さんたちも同意見らしく先ほどからくすくすと笑っている。
（おてがみ？　おてがみ？）
（トリスから！）
（うふふ）
（しーっ！　静かにー！）
（読んだ？　まだ？）
その光景を眺めながら、私は部屋のシーツとか新しい服とかいつ買いに行けるかなぁなんて考えて、お茶をすすった。

日の都、ヴァーウェンへようこそ（後書き）

閲覧、お気に入り登録、ありがとうございます。

きっと私たち両思い（前書き）

閲覧、お気に入り登録。ありがとうございます。
ガールズラブではありません。友情です。

きっと私たち両思い

正門越しに見える校舎は予想よりも小さかった。来る途中でお城を見たからだろうか。それにしたって私が通っていた普通科の高校に比べてもずいぶんと小さい。進学校だというからなんとなく高校をイメージしていたが、中学校程度の大きさだろうか。

「1学年に何人くらいいるの？」

「ええと、私がいた頃は30人くらいだったかしら」

過疎の進んだ地元の小学校が1学年あたりそれくらいの人数だった気がする。

「少数精鋭なのね……？」

「年によってまちまちよ。実力があればいいんですもの。多い年では60人くらいいたこともあるって聞いたわ」

そんなに違うと教室の確保が大変なんじゃないかなぁ。それにしてもさっきから視線がウザい。

私たち金と黒一色の師弟は平日の登校風景の中で明らかに目立っていた。アーニャの顔色は家を出た時と比べるとだいぶ悪い。そんな視線よりも馬（？）車や馬（？）で登校している生徒が存在することのほうが面白すぎる私は笑いをこらえるのに必死だ。

あ、白馬（？）！　白馬（？）に乗った王子様に追い越された！

「っ、ふふっ」

「モトコ？　大丈夫？」

「だ、だいじょぶだいじょうぶふっ」

笑ってはいけないと思えば思うほど笑いが込み上げてくるのはなんでなんだろう。

アーニャに見当違いな心配をされながら正門をくぐると、好奇の視線がいっそう強くなった。そこかしこでヒソヒソと話す声も聞こえる。名門校も案外お行儀が悪いのね。良かった、これなら私みたいな常識知らずでもやっていけそう。

背筋を伸ばしてぐるりと見回してやると、殆どの生徒は目を背け、そそくさと立ち去って行った。制服っぽい色とりどりのローブ以外は自由らしく、その下からはフリルや皮が覗いている。足元はタイツや生足、スラックスと多岐にわたっていた。スカートめくりならぬローブめくりとか、したらだめかな。

「で、どこに行けばいいの？」

「あ、えっと……」

「フラノワ師とサカキバラ殿ですね？　お待ちしておりました」

いつからそこにいたのか、緑色の制服のフードを目深にかぶった私と同じくらいの背の高さの少年が声をかけてきた。

「どうぞ、こちらへ」

案内されるままに私たちは校舎の奥へと進む。やがて人気のない廊下の小さな部屋に通された。そこは椅子が2脚とテーブルが一つ、そしてテーブルの上には紙とペンがおいてあるだけの部屋だった。

「こちらの書類に記入をお願いいたします」

書類には名前や髪と目の色なんかを書くようになっていた。言われたとおり書き進めて誕生日、の項目で筆を止める。１０月２０日、とは書けずにアーニャの書類を盗み見ると、『日季日節日中』と書かれていた。金髪金目のアーニャは誕生日も日系統なのか。ちょっと迷って『月季月節月中』と書き込んだ。見ていた精霊さんに笑われた。これでいいんですー。

先に書き終えたアーニャは少年に案内されて部屋を出ていった。待機を言い渡されたのでとりあえず書類に間違いがないか見直す。

ドアのノックって2回だとトイレ、3回だと恋人とか家族を連想するとかいうけど実際どうなんだろ。

「お待たせしました。ご案内致します」

「はい」

笑顔で返事をして立ち上がる。常識が通用しないのなら私にできることはただひとつ、誠意を見せるくらいだろう。

背筋を伸ばして胸を張って顎を引いてお腹から声を、でも肩の力

は抜いて。目の前にいるのは愛しい人だと思って、笑顔を。ああ、でも、誰を？
「こちらです。どうぞ」
そう言って少年はドアを開けてくれた。ちくしょう。人の心配返せ。
「ありがとうございます」
アーニャ。
そうね、彼女が一番ふさわしい。がんばろうね、アーニャ。
入る前の一呼吸、アーニャを思い浮かべて、
「失礼します」
私は一歩、踏み出した。
「素子・漆原です。よろしくお願いします」
「どうぞおかけになって」
「はい」
広めの部屋には恰幅の良いおばあちゃんが一人で私の書類を手に微笑んでいた。あれ？　いつの間に受け取ったんだろう。さっき少年に渡したはずなのに。
白髪の混じった茶色の髪は肩口でカールしていて、おばあちゃんが話すとふわふわとゆれる。優しそうな笑顔が心を和ませるがこいつは油断ならん。年の功ってのは手強いんだから。
「私はこの学校の校長をしているクルラ・バルゲンです。よろしくね。それじゃぁ早速――」

「――では、これで実技と筆記は終わりです。お疲れ様」
「ありがとうございました」
内容はアーニャと修行した内容の総復習みたいなものだった。あの呪文ももちろん詠唱した。
「最後に質問するわね。確認みたいなものだから楽にしてちょうだい」
「はい」

おそらくはここからが勝負。
「まず、あなたの出身地だけど『ニホン』というのはどのあたりにあるのかしら？」
はいきたー。一瞬、郷里が頭をよぎる。大丈夫、大丈夫。まばたき一つで鉄壁の営業スマイルを用意しろ。働いた四年間は無駄じゃなかったはずだ。
「この大陸上ではありません。遠い海に浮かぶ、小さな島国です」
嘘はついていない。
「そんなに遠いところからわざわざフラノワ師の弟子になるために出てきたの？」
「はい。一色の魔術師がいると聞いたものですから」
この辺りはアーニャと打ち合わせてある。私は魔術師になるために師事する人を探していて、同じ一色のアーニャに弟子入りしたという筋書きだ。
「それだけの理由で弟子入りしたの？」
そう問いかけられて思い出したのは泣きそうなアーニャの顔だった。
「……最初は、利害の一致でした」
理解出来ないことが突然起こって、どうすればいいのかわからなくて、あの時の私は何かに縋らなくちゃ立っていることすら出来なかったと思う。アーニャもそうだった。だから丁度良かったんだ。
「今は、アーネッカ師が尊敬できる人だから、私も弟子として認められたいと思っています」
恥ずかしがり屋で泣き虫で料理が上手で可愛くて心配性で言いたいことがはっきり言えなくて、一生懸命夢を追いかけてる彼女のことが、好きだから。とっても綺麗で優しい、私の大事なお師匠様。
帰るのは、アーニャが先生になるのを見届けてからでいい。そう誓った言葉が嘘じゃないと思えるくらいには、あなたの弟子でいられて私は幸せよ。
「ふふ、そう」

「はい」
「あなたたち、そっくりね」
柔らかく校長先生が微笑むと、右側の壁が掻き消えた。壁があった床には細長い魔方陣が描かれていて、それを挟んだ反対側の部屋にはアーニャが私と同じように椅子に腰掛けていた。
「二人共合格よ、おめでとう」
「ありがとうございました」
椅子から立って一礼する。右側でアーニャが同じように立ち上がる気配を感じた。
校長先生と案内の少年に見送られて部屋を出た。人気のない廊下を戻って、正門を出て、ずっと無言のまま私たちは朝来た道を引き返していた。
「……」
「アーニャ」
「ぅ、うん」
「そんなに泣いたら、干からびちゃうよ？」
「う、んっ」
ハンカチを渡すと更にぼろぼろと涙を零す。しょうがないなぁ。
合格を言い渡されてからアーニャはずっと泣いていた。
「休憩していく？」
「うん、うん」
ちょうど道の先には円形の広場が見える。露店もあるみたいだから何か温かい飲み物でも飲んだらちょっとは落ち着くんじゃないだろうか。そろそろお腹も空いたことだし。
服の裾を引かれて振り返ると、アーニャは泣きながら笑っていた。
「あ、あのね、モトコ、あの、」
「うん？」
「あ、りがとっ」
こちらこそ、ありがとう。
口にだすのがなんとなく恥ずかしくて、私は首を横に振ってアー

ニャの手を引いた。
「ふぅ」
スコーンみたいなものを食べて、温かくて甘い飲み物を飲んでやっと落ち着いたらしい。コーヒーとチョコを合わせたような味の飲み物は寒いからか格別においしかった。
「今日はこの後どうするの？」
「ええと、そうね、入学するのに必要な物を買いに行きましょうか。年越しの買い物もしたいし」
年越しかぁ。蕎麦とか餅とかないよなぁ。
帰り際にもらった書類を確認するとローブやノートを用意するようにと書かれていた。入学まであと一季あるが早めに準備するにこしたことはない。
「帰ったら兄弟子様にご報告のお手紙も書かなくちゃね」
「！　そそっそうね」
この間の手紙でも、合否を報告するようにと言われたらしいから本当は早く帰りたいのかもしれない。
「そういえば、私って兄弟子様にご挨拶しなくていいの？」
「新年会にいらっしゃるそうだからその時にご挨拶すればいいと思うわ」
「新年会？」
「年が明けたら王族の方々が主催される新年会があるの。ヴィアン魔術学校は国立校だから教職員も招待されるのよ。もちろん弟子を連れていってもいいの」
言いながら書類の中から招待状を取り出した。日付は風季風節風中、つまり元旦だ。
新年会ということは忘年会もあるんだろうか。新人は一発芸を強要されたりとか、いやいやそうじゃなくて。
「そっか、兄弟子様は貴族だから招待されてるんだ？」
「ええ、そうよ」

「ふーん。……ねぇ、これってさ、ドレスコードとか、あるの？」
「え、ええ、制服のローブであれば問題はないはずよ」
おお、ここでも制服は万能なのか。私だったら色は黒になるのかな。
「アーニャは？」
「え？」
「アーニャは何を着ていくの？」
「私も教員用の制服があるから……」
ちぇっ、つまらん。
「あと、マナーもよくわからないんだけど」
「普通にお行儀よくしていれば大丈夫よ」
変な所で心配性ね、とアーニャは笑った。あ、よかった、笑ってくれた。
「確かこの近くに制服を扱っているお店があったはずだからまずはそこから行きましょうか」
「うん。ギルドにも行こうね」
「わかってるわよ
お金を稼ぎたいから私もギルドで冒険者として登録をしたかったのだが、お師匠様権限で学校に合格するまでは禁止されていたのだ。しかも、卒業するまでは危険な依頼を一人で受けてはいけないという制約付きだ。
広場からは放射状に広い道が何本か伸びていて、そのうちの一本に入って少し進むと目的の店があった。ドアには『ヴィアン校制服取り扱い許可店』の文字がある。
「いらっしゃいませ」
「こんにちは。生徒用と教員用の制服の採寸をお願いします」
「はい。ヴィアン校ですね？　ご入学おめでとうございます」
「あ、ありがとうございます」
店員さんに連れられて店の奥の試着室に入る。
「では、失礼します」

「はい、お願いします」
「丈や色など何かご希望はございますか？」
「いえ、特には……あ、ちょっとお聞きしたいことがあるんですけど」
「はい、なんでしょう？」
「髪って、どこで買い取ってもらえますか？」
最初にアーニャに買ってもらった巾着には人毛が使われていた。
ということは人毛は売れるのだ。冒険者になることが許されたとはいえ、どの程度稼げるかは定かではない。弟子だからといっていつまでもアーニャになんでも買ってもらうわけにはいかないのだ。
「髪、ですか？　当店でも一応買取はさせていただいておりますが」
制服を扱っている以上、ある程度は学校と関係のあるしっかりした店ということだろう。あんまり変な店で売るよりは、多少安く買われてもこういう店の方がいいのかもしれない。
「じゃぁ、お願いします」
「かしこまりました」

「遅かったわね、モト、コ……？」
「ごめんごめん」
「どうしたのモトコ、その髪」
「うん？　似合わない？」
アーニャはぽかんと口を開けて私の頭を見ている。
自分ではショートの方が似合うかなと思ってたんだけど、やっぱりちょっと切りすぎたかな。
「いえ、モトコの印象によく合ってる、けどそうじゃなくて！　なんで……」
「お小遣い稼ぎに。すぐ伸びるから大丈夫よ」
断じて私がエロいからではない。
泣きそうな顔で黙りこむアーニャを笑って促して店の外へ出る。
「じゃぁ次はギルドね。どこにあるの？」

「あ、えっと、あっち……」
ああ、もう。そんな顔しないでよ。
「私ね、自分にはこのくらい短い方が似合うと思ってたの」
首がスースーする。さすがにちょっと寒いなぁ。
「元彼が長い髪が好きだって言うから、伸ばしてただけなの」
「お付き合いしている人がいたの？」
「うん。でもさ、ちょうどこの世界に来た前日に別れてたの」
一方的だったけれど、新しい彼女が慰めてくれるだろう。
「だから、ちょっとこう、ケジメというか、まぁ気分転換みたいなものよ。伸ばしたままにしとくのもなんか癪だし」
２年弱付き合ってたけど今ではもう、好きだったのかどうかもよくわからない。
「モトコ」
両手を掴まれた。顔が近い。なんだ、どうした。
「今日は、飲みましょう」
「うん？」
これはあれだな。私が傷心だと思ってるな。
アーニャは私の手をぐいぐいと引っ張って歩いて行く。さて、なんと言ったものか。
「ギルドに行って、買い物を済ませたら、今日は晩御飯においしい物食べて、お酒でも飲みましょう」
「……うん、そうだね」
まぁ、いっか。

お酒は二十歳になってから

視線が痛い。おかしいな、私ってこんなに繊細だったっけ。
女の子特有のひそひそ話のトーンは、私が露店で足をとめるたびに大きくなる。そんなに一色が珍しいのだろうか。
今日はアーニャが学校に呼ばれているので私は一人で街にお使いに来ていた。ついでにちょっと露店をひやかしてやろうと思ったのだが、ほんの数メートル歩いただけで女の子たちの視線という名の集中砲火に早くも帰りたくなっているのが現実だ。
（モトコ？）
（モトコー？）
大丈夫だよ、ありがとう。
ささくれだった気持ちを精霊さんに慰められた。いかんいかん。こんなんじゃいかん。大丈夫、この程度なんでもない。私はアーニャの弟子だもの胸を張らなくちゃ。
二人分のローブが入った包みを持ち直して、こちらを見ている女の子の視線にたった今気づいたふりをして首を傾げてみせた。「何か言いたいことがあるなら面と向かって口で言えば？」という意味だ。
きゃ、とかなんとか言って少女たちは去って行った。
（きゃー）
ふんだ。早くお使いを済ませて帰ろう。

「こんにちは」
「はい、いらっしゃい」
酒屋兼酒場である店内にはまだ時間が早いからか客の姿は無い。決してやさぐれて一人で飲みに来たわけではなく、晩酌用のお酒が無くなってしまったので買いに来たのだ。
店主のおじさんの前に大きめのビンを出した。お店にこのビンを

持って行ってお金を払えば、入っていたお酒と同じ物を入れてくれるシステムなのだ。ちなみに瓶底にはアーニャの魔方陣が描かれているので中身が入っていてもいなくてもとても軽い。
「これにお願いします」
「はいよ。……おお、誰かと思ったらお嬢ちゃん、アーニャちゃんのお弟子さんか！」
「はい、モトコです」
「そうそう、モトコちゃん。髪短いからわかんなかったよ」
この店には街に着いて何日もしない内にアーニャと一緒に挨拶に来ていた。なんでも、ヘリお師匠様の代からの馴染みの店だそうだ。
「それにしても懐かしいねぇ。アーニャちゃんもよく、ヘリさんのお使いで来てたよ」
「そうなんですか？」
話しながらおじさんは手際よくお酒をビンに詰めている。
アーニャの小さい頃かぁ。きっと可愛かったんだろうなぁ。
アーニャが弟子だった頃の話を聞こうとしたとき、扉が開いてお客さんが入ってきた。
「いらっしゃい」
「キア酒を」
そう言ってカウンターに腰掛けたその男の人は一瞬鋭い目付きで私を見た。
その灰色の瞳にデジャヴを覚えて、はて？　と首を傾げた。こんな悪人面の知り合いいたっけ？
（シュラ！）
うん？　ああ、そっか！　この間寝てて売られそうになってたおじ様……やば。どうしよう。えーと、うん。ここは初対面を装うことにしようそうしよう。きっと向こうだって触れられたくないはずだ。そうだ。
「はい、お待ち」
たぷん、とシュラさんの目の前に出されたジョッキの中身が音を

立てた。あれって、この間のどぶろくの実のお酒？
「モトコちゃん、キア酒が気になるのかい？」
おじさんの言葉に、シュラさんがこっちを向いた。ぎゃー。
「いえ、そういうわけではないんです」
「味見してくかい？　アーニャちゃんには黙っておくからさ」
笑いながらおじさんは小さいコップにキア酒を入れて出してくれた。出していただいたものは飲まねばなるまい。
「わ、いいんですか？　すみません、ありがとうございます」
顔がにやけるのを自覚しながらコップに口をつけた。
くぅ。うまい。実から直接飲んだ時よりも雑味が少ないと言うか、これ、日本酒に近くないか？
「お嬢さん、キア系のお酒が好きなんですか？」
「え？　ええ、そうなんです」
無視するわけにもいかず、笑顔で答える。
正面からちゃんと見てもやっぱりシュラさんは悪人面だった。美形であることは確かなのだが、凄みがあるというか、オールバックにしてサングラスかけてスーツを着たらやのつくご職業にしか見えないんじゃなかろうか。
「あの、こういう味のお酒って他にはないんですか？」
何か聞かれる前に店主のおじさんに話題をふる。日本酒が飲みたいだけともいう。
「うーん、キア系はあんまり出ないから、うちもそれしか置いてないんだ。すまないね」
「そうですか……」
「それなら、いい商人を知ってますよ」
私たちがシュラさんを見ると、彼はにやりと笑った。ひぃ。絶対カタギじゃないよこの人。
「ちょうど私が泊まっている部屋の隣にキア酒を売りに地の国からヴィアンまで来ている男が泊まっているんです。よろしければ彼の所までご案内しますよ」

地の国はキア酒の名産地だ。ということは本場の味が楽しめるわけである。
「いえ、お師匠様に『知らない人に付いて行ってはいけません』と言われているので……すみません」
そうでなくとも遠慮したい。
店主のおじさんは「ふられちまったなぁ」なんて言って笑っている。
「ははっ！　この人、顔は怖いけど悪い人じゃないから大丈夫だよ、モトコちゃん」
「突然失礼しました。……なら、彼を呼んできましょうか？」
「そこまでしていただくわけには」
「いいんですよ、彼も酒が売れるまで故郷に帰れないとぼやいていましたから、稼がせてやってください」
どう見ても何かを企んでいるとしか思えない笑顔でシュラさんは笑っている。
「おお、そりゃいいな。今日はうちで試飲会でもしようか」
おじさんは早くも乗り気で奥さんを呼んで何やら話し始めた。
試飲会。なんて素敵な響き。私もこうしちゃいられない。
「あの！　私、一度戻ってまた後でお師匠様と来ますね！」
慌ただしくお金を払って酒瓶を抱える。シュラさんに見られているけれど無視よ、無視。
「おお、気をつけてな」
「はい。失礼します」

＊＊＊＊＊

「アーニャ、早く早く！」
「待って待って」
学校から戻ってきたアーニャを急かして、私たちは薄暗い道を酒場へと急いでいた。はく息は白いし、首は寒いがこれから温まるの

だから問題はない。
「ふふ、モトコったらそんなにはしゃいで子供みたいよ？　ニホンシュって、確かモトコが持ってきたお酒よね？」
「そう！　こっちに来てから和風の味に飢えてたからうれしくって。アーニャのご飯もすっごくおいしいんだけどさ、故郷の味って忘れられないじゃない？」
「そうね……。それなら、他にもないか精霊さんに聞いてみたらどうかしら？」
「精霊さんに？」
（呼んだ？）
（呼んだー？）
ふよふよと数人が集まってきた。
聞いてみたら、と突然言われても何を聞けばいいのやら。
「ええ、モトコが皆に聞きたいことがあるんですって」
（なになにー？）
「え、えっと、じゃぁ、お米！　お米ってある？」
日本人といえばお米でしょう。ナンのような主食ももちろんおいしいのだが、黄金色の実をつける穀物、あれがあればどんなにうれしいか。
（うーん？）
（うーんうーん？）
（そんな草ないよー？）
「そっかぁ……」
やっぱり無いよねぇ。
「モトコ、味をもっと良く想像してみて」
私と精霊さんの会話を聞いていたアーニャが言った。
「味？」
「そう。それは生で食べるの？」
「ううん。炊くの。そうするとつやつやふっくらになって、噛めば噛むほど甘さが出るの。炊きたての匂いといったら、もう」

おこげも好き。炊きたてなら何もかけずに食べるのも好き。梅干し、おかか、昆布や卵をかけたのも好き。いかん、よだれ出てきた。
（あ！　わかったー！）
（あるよー）
（あるあるー）
「え、本当に？！」
（イセンでしょー？）
イセン？　え、本当に？
（そうだよ）
（イセンのおあじー）
「ふふ。ほら、もう着くわよ。明日市場にいって探してみましょ」
「うん！」
この調子なら出汁とかも見つかるんじゃない？　醤油もどきとか！
うきうきしながら店の扉を開けると、昼間来た時とは違ってすっかり盛り上がっていた。
「いらっしゃい！　待ってたよ！」
「あなたがモトコさんですね？　ありがとうございます！」
入って早々、３０代くらいのお兄さんにお礼を言われた。後ろでは店主のおじさんが笑っている。
「え？　いえ、どういたしまして？」
「本当にありがとうございます。これで地季までに故郷に帰れます！」
「モトコちゃん、こいつが例のキア酒の商人だよ。持ってきた酒、もうすぐ完売しそうなんだ」
「え、私の分は？！」
「もちろんとってありますよ、何からお飲みになります？」
いやっほう！　今日は飲むぞー。
シュラさんが空けてくれた席に座って、出されたものをちびちびと味見する。うーん、おいしい。
「お嬢さんは地の国の出身なんですか？」

シュラさんがそんな私の飲み方をみて尋ねてきた。彼の目の前にももちろんキア酒が置かれている。
「いえ、違います。その、もっとずっと、遠い所です」
肴には何かの干し肉がおいてあったが、食べてみるとさきいか味だった。うん。さすが、よくわかってらっしゃる。
「そうでしたか。お嬢さんくらいの年頃の方がキア酒の良さをご存知だとは思わなかったものですから、てっきり地の国の方かと」
「では、ええと、あなたは地の国の方なんですか？」
シュラさん、とも呼べずに聞き返した。
「これは失礼、申し遅れました。私はメイ・ライ、水の国の生まれです。今は冒険者をしています」
「素子・漆原です。魔術師見習いです」
あれ？　名前、シュラさんじゃなかったっけ？　偽名かな。
疑問に思っていると、話を聞いていたらしい客が私たちの会話に口を出してきた。
「水の国？　なぁ、あの噂は本当なのか？　今の国王がそろそろヤバいってやつ」
「ええ、床に伏せっておいでだそうですよ。ですから今は弟君が仕切っておいでだとか」
「お世継ぎはまだ小さいんだろ？　なら、次の王様はその弟君かねぇ」
「街道が荒れなきゃ誰だっていいさ。帰れなくなっちまう」
「違いない」
陽気に笑う客たちのほとんどは冒険者なのだろう、あちこちのテーブルでどこの街道に盗賊が出たとかどこの国のお姫様が婚約するそうだとか飲みながら情報交換をしている。
興味もないのでざわめきを聞き流しながら、買って帰るお酒の吟味をする。ううん、ここは辛口かなぁ。
「モトコさん」
「はい？」

酔ってきたのか、シュラさんの目元はほんのりと赤くなっていて危ない色気が漂っている。ぐらついてなんかないぞー。確かに今まで出会ったことのないタイプの美形だけど！

「ここでお会いしたのも何かの縁です。しばらくはこの街にいるつもりですので、もし荒事のご依頼があれば格安でお受けしますよ」

そう言って、シュラさんはこの近くの宿泊施設の名前を教えてくれた。ヴァーウェンのように大きな街には長期滞在する冒険者も多いので、そういった人のための施設らしい。

「例えば、そうですね、薄暗い路地に用があるときにでも呼んでください」

喋るな、ということか。釘を刺されずともアーニャにも言っていない。シュラさんは凄みのある笑顔で私の返事を待っている。まいったなぁ。迷惑かけたくないのに、めんどくさそうな匂いしかしない。

「……それじゃぁ、何かあったらお願いします」

私はそう答えることしかできなかった。

お酒は二十歳になってから（後書き）

閲覧、お気に入り登録、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5300y/

---

candy days

2011年11月22日03時15分発行